徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告
Bull.Tokushima Pref. Torii Ryuzo Memorial Mus.
No. 3：1-47, March 2017

【論　　説】

徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究（上）
― 鳥居龍蔵等による 1922（大正11）年発掘調査の出土遺物の様相 ―

湯浅　利彦

はじめに

徳島市城山貝塚は，鳥居龍蔵等による発見と発掘調査が行われた遺跡として，徳島と鳥居を語るうえで欠かせない遺跡である。そのことは城山山麓に設置された 1953（昭和28）年11月建立の鳥居龍蔵記念碑に象徴される。しかし発掘調査報告書は刊行されず，成果の把握は断片的に繰り返し紹介された概要に止まっている[(1)]。また徳島の縄文時代を考えるときにも重要な遺跡で，徳島の歴史文化に関するどの概説書にも紹介されるが，実態は不明な点が多い。そうしたなか，報告書の写真図版として組まれたであろう徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の所蔵資料が本研究報告第 1 号（2013）で紹介された。

本稿は，現在把握できる当時の資料，つまり東京大学総合研究博物館に遺された出土遺物，発掘に直接関わった鳥居龍蔵（1870～1953）や地元の井上達三（1867～1929）・森敬介（1888～1947）・前田正一（1892～1955）・笠井新也（1884～1956）等の遺した記録，新聞報道などを精査し，それら資料から，遺物の出土状況を調査過程に位置づけてその様相を把握する試みである。

なお，それぞれの遺跡呼称については，当時から「第一岩窟」「第二貝塚」「巌窟」「岩窟」「4 号石棺」など様々であるが，本稿では引用を除き「第 1 号貝塚」「第 2 号貝塚」「第 3 号洞窟貝塚」「第 4 号遺跡」「第 5 号遺跡」とする。

1　現代に遺された当時の資料

把握できた当時の資料を次のとおり 7 分類した。

出土遺物についての情報は個別に仮番号を付けて表 1 ～ 7 にまとめた。表の分量が多いため，まとめて末尾に掲げた[(2)]。

（1）新聞資料

徳島の地元紙は，『徳島毎日新聞』（以下『徳毎』と略す）『徳島日日新報』（以下『日日』と略す）の 2 紙があった（図 1・2）。ライバル関係にあることは他の記事を見ても明らかで，競いながら発掘調査の報道合戦を繰り広げたため，詳細な状況が報道された。ただ『徳毎』が事実報道に重点を置いたのに対し，『日日』は，鳥居や周辺の人物の見解やエピソードに重点を置いた傾向がある。『国民新聞』や，『読売新聞』『萬朝報』などの全国紙にも報道された。今回は徳島県立図書館所蔵のマイクロ

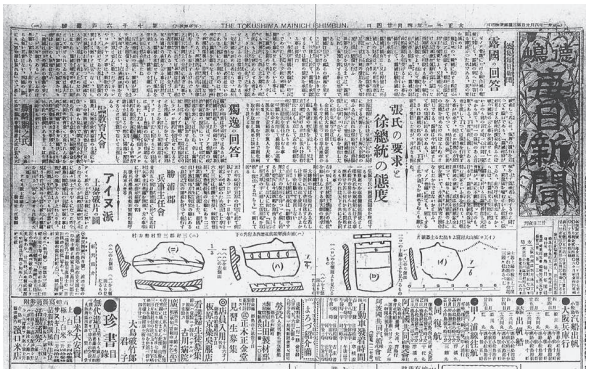


図 1　『徳島毎日新聞』大正11年 4 月24日付紙面

図 2　『徳島日日新報』大正11年 4 月 6 日付紙面

フィルムを中心に記事を拾った。[3]

(2) 当時の刊行誌

当時鳥居は『人類学雑誌』を主宰していたため，当該誌には様々な速報が掲載されている（東京人類学会　1922a，1922b）。地元徳島では，史蹟名勝天然記念物調査会を前年の1921（大正10）年に県が設置し，ほぼ同じ頃，笠井藍水を中心に阿波名勝会が結成され，会誌として1922年 2 月に発刊の『阿波名勝』は，6 月刊行の第 2 号で貝塚特集を組み，城山貝塚の情報を中心に掲載された（阿波名勝会　1922a，1922b，1922c，笠井新也　1922，笠井藍水　1922，図 3）。

この中で笠井新也は県内各地の貝塚情報を概観しながら，城山の各貝塚について記述しているが，第 1 号貝塚については発見時の状況に限定しており，第 2 号貝塚・第 3 号洞窟貝塚の発掘状況に主眼を置いている。第 3 号洞窟貝塚の性格については「鳥居博士の発表に先って自分一個の所見を述べることは穏当を欠くのみならず，また読者を過るの恐がないともいえない，予は姑く読者と共に博士の発表を俟って蒙を啓きたいと思う」（笠井新也　1922：63）と意見を保留している。なお，自身が発見した第 5 号遺跡（城山山頂部貝塚）についての記述があり，現在残る資料の中で当該遺跡について最も詳しい情報である。

鳥居も翌1923年 7 月 1 日発行の『教育画報』誌に「徳島城山の岩窟と貝塚」を発表した（鳥居　1923，図 4）。経緯や発掘調査報告書との関係[4]については別稿に譲るが，内容は城山の地勢的な説明と 3 カ所の貝塚の発見，特に第 3 号洞窟貝塚の内部とその前面の「ドルメン」に力を注ぎ，第 2 号貝

図 3　『阿波名勝』表紙

図 4　『教育画報』誌の鳥居報文

図 5　東京大学総合研究博物館人類先史部門所蔵の城山貝塚関係出土遺物

塚の人骨出土状況や土器・石器の概略が述べられているが，第 1 号貝塚その他の遺跡については記述がない状況である。

（3）発掘出土品（末尾表 2，図 5）

東京大学総合研究博物館人類先史部門所蔵の230点と注記・ラベル・封筒など来歴を表す資料群。そのうち第 3 号洞窟貝塚を中心とした86点は当館で借用し常設展示している[(5)]。現存する遺物は城山貝塚だけでなく同時期に行われた周辺遺跡の遺物27点も含まれている。

（4）森敬介資料（末尾表 3 ～ 5，図 6 ～ 8）

徳島県立図書館所蔵。「徳島公園城山貝塚出土品拓本」（以下「出土品」と略す。21点），「徳島公園城山遺跡遺物集」（以下「遺物集」と略す。33点），「徳島公園城山第二貝塚遺物集」（以下「第二貝塚集」と略す。54点）の出土遺物拓本集のほか，メモ，原稿草稿などが遺されており，原稿の一部は新孝一が翻刻してまとめた（新　1983）。

図 6　「徳島公園城山貝塚出土品拓本」

（5）前田正一資料（末尾表 6，図 9）

徳島県立図書館所蔵。「前田氏は城山貝塚の見取図，遺物の見取図をまとめて一冊としている」（笠井新也　2010：40，図 9）ほかにも，出土遺物のスケッチ・拓本，岩窟の出土状況図や土層図などが数種の綴りに残されている。確認できた城山貝塚関連出土遺物のスケッチ・拓本類は90点。

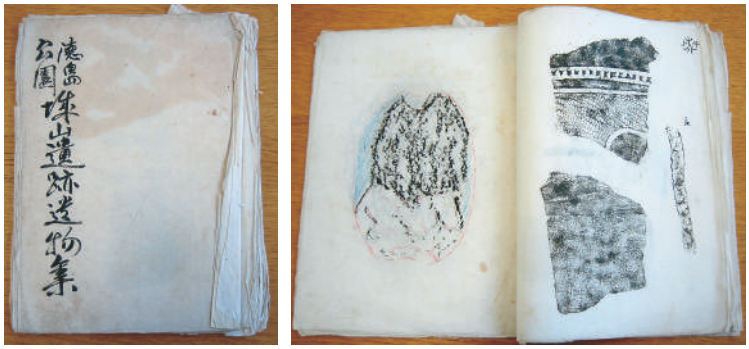


図 7　「徳島公園城山遺跡遺物集」

（6）井上達三資料（末尾表 7）

当館所蔵。「国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地」（以下「遺跡地」と略す）。拓本資料23点を含み，井上の所感が記録されている。その全容と解題は本研究報告第 1 号で長谷川賢二（長谷川　2013）がまとめた。

図 8　「徳島公園城山第二貝塚遺物集」

（7）笠井新也資料

徳島県立博物館に笠井倭人氏が寄贈した新也のノート「城山貝塚発掘記」。貝塚発見の経緯（第 1 ～ 3 号貝塚）と 4 月19日から 5 月 5 日まで鳥居の現地調査期間について，県の史蹟名勝天然記念物調査会委員として記した調査観察記録が中心で，城山貝塚に関する戦後の記録もある。『青藍』第 7 号で筆者が翻刻・解題

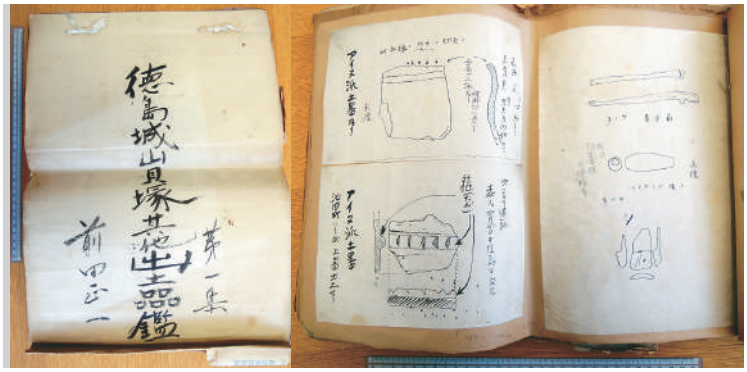


図 9　前田正一スケッチの一部

した（笠井新也　2010，湯浅　2010）。

出土遺物については，笠井新也が前田正一を訪ねた1953（昭和28）年5月30日の記録に，前田正一が，「遺物の面白いものは鳥居先生が大学へ持帰られたので，今も東大人類学教室にその一部が残っていると思う。遺物の大部分は井上氏の子息井上紀貞，岩佐紀年両氏が保管していたが，戦災で焼失してしまった。」（笠井新也　2010:39）と語った[6]ように，出土遺物の全容は知り得ない状況となっている。

「遺物の面白いもの」は，東京大学総合研究博物館人類先史部門に所蔵されている。発掘時に現地で記録された注記・メモ，東大に持ち帰ってのラベルや注記などの整理，昭和前期に整理された痕跡もあり，調査経過にも関わって注目すべき点が多くある。

また，現物が遺されていない「戦災で焼失」したとみられる出土遺物の中には，拓本やスケッチとしてその一端を知ることができるものもある。これらを総合しながら城山貝塚と総称される5つの貝塚遺跡の出土遺物の状況を整理する。

笠井新也の1952（昭和27）年7月14日の記録に，「五月三日の午後のことであった。人骨の出た第二貝塚（城山東北麓）の下手を掘っていた井上氏が「こんな土器が出た」というのを見ると，まごう方なき縄文土器の破片であった。一体城山貝塚から出る土器は大体弥生式系のものであって，稀には縄文式系のものと見られるものも出るのであるが，縄文そのものが施された土器片はまだ一片も出ていなかったのである。」（笠井新也　2010：38）と，30年前の思い出を述べているが，調査における関心の中心は縄文土器（当時アイヌ式）にあったことがここでも窺われる。鳥居自身も城山貝塚発見前日の講演会で「徳島にアイヌの遺跡は未だない」と述べたばかりであり，鳥居や周囲の者も特に関心が高かった。つまり出土遺物は，縄文土器を中心に記録しようというバイアスが掛かっていたことも考慮が必要である。

なお，新聞や論文等に挿図として掲載された拓本・スケッチ・写真は，掲載誌と対象資料をまとめた末尾の表1と図1･10～15の27点，重複を考慮すると実質19点である。これらの資料が城山貝塚を考える上でポイントとなった資料であることは言うまでもない。例えば井上が発見した縄文土器は図10の「第一図」の土器であり，図11の2・3の土器はそれぞれ第2号貝塚・第3号洞窟貝塚発見の際に出土したものである。

図15の『徳島市史』の挿図は，その後，天羽・岡山（1985），天羽（1994）にも引用され，城山貝塚の代表的出土遺物と捉えられており，これらに基づいて遺跡の概要紹介がなされてきたことを押さえておきたいと思う。

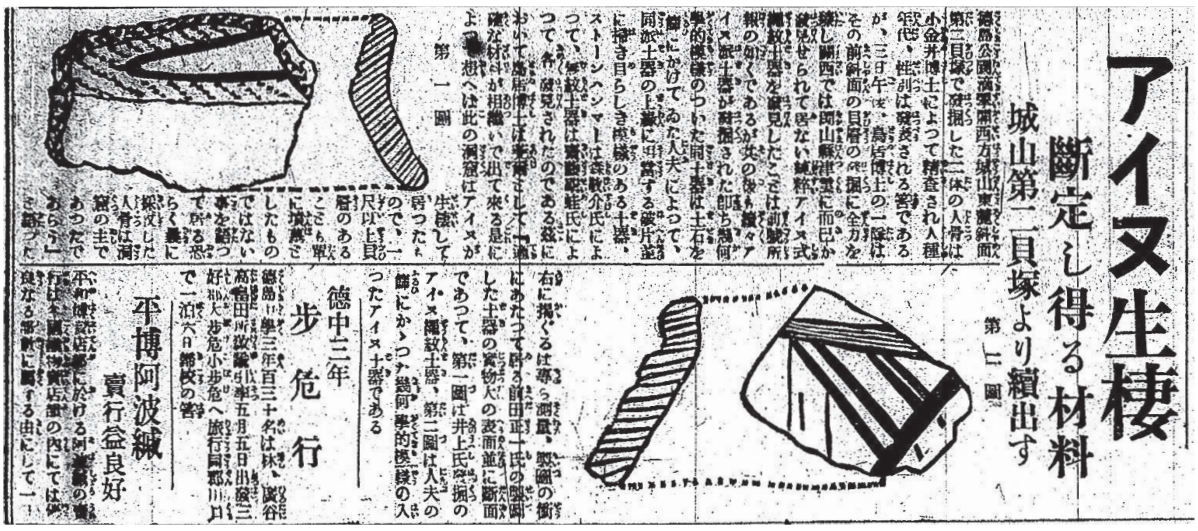

アイヌ生棲
斷定し得る材料
城山第二貝塚より續出す
第一圖
第二圖
徳中三年
歩危行
平博阿波絨
賣行益良好

図10　『徳島毎日新聞』1922（大正11）年5月5日付

図11　『阿波名勝』第２号1922　口絵写真

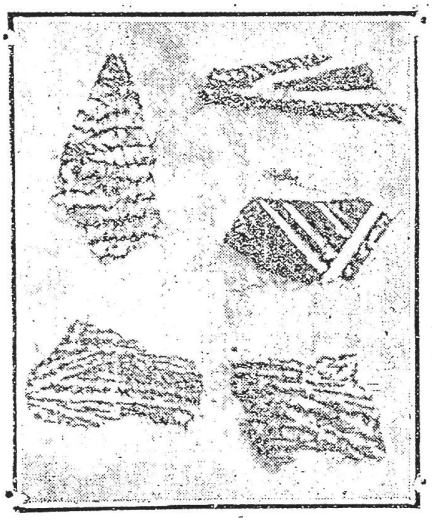


図12　『阿波名勝』第２号1922　挿図

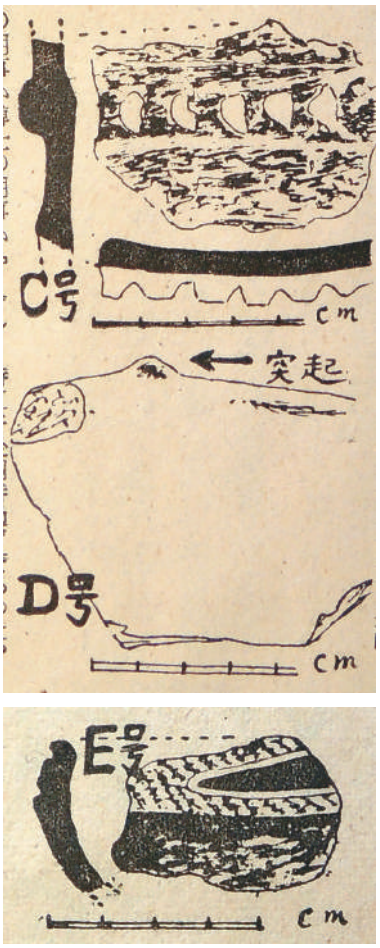
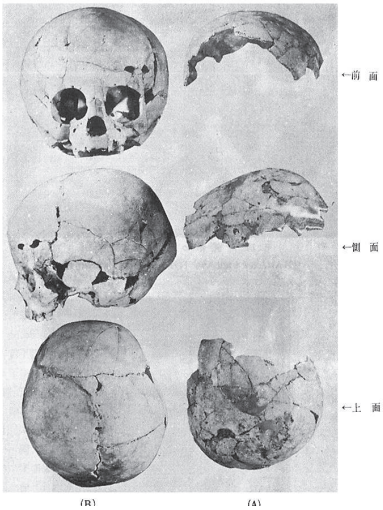


図13　前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年４月11日・12日付



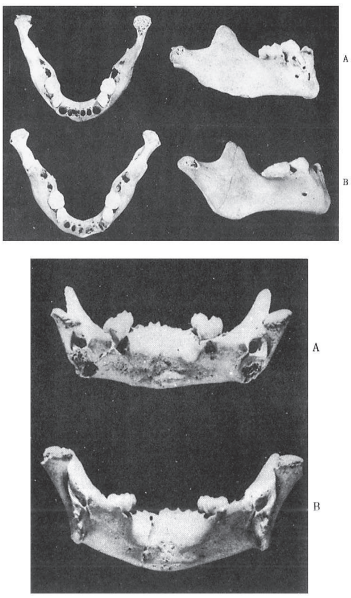


図14　城山第２号貝塚の幼年人骨（鈴木　1970）

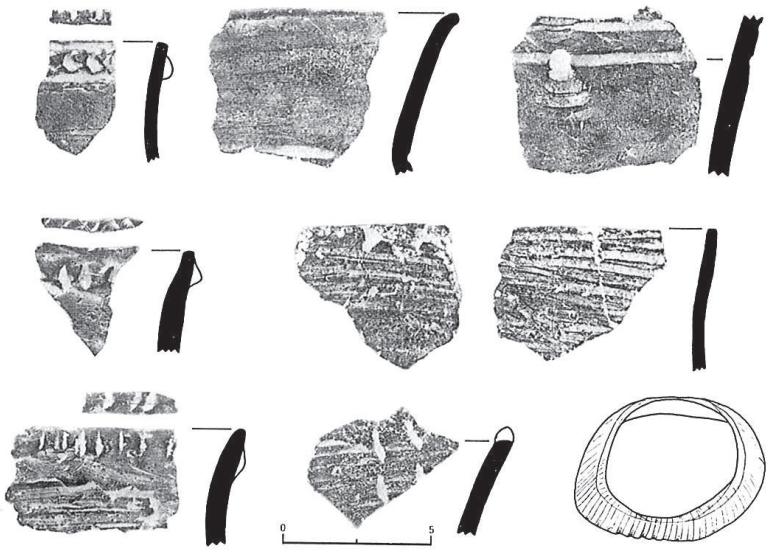


図15　『徳島市史』第一巻1973　挿図

2　調査に至る経緯と経過

経緯と経過をまとめておきたい。出土状況や出土遺物に関わる情報に重点を置くこととする。末尾に表1～7としてまとめている各遺物で，出土月日が記録されているものは【　】で表の仮番号を示した。重複記録の場合は，現に遺物のあるものや仮番号順を優先して記載するが，表1（図1・10～15）記載のものは併記を原則とする。また，本研究報告第1号「資料紹介　城山貝塚調査写真」で掲載された写真についても，写真裏に日付の記載されているものについては，同様に《　》で研究報告の図番号を示すこととする。

(1) 発見に至る経緯

この年1月鳥居龍蔵は東京帝国大学理学部人類学教室の主任に就任した。1月28日付の『読売新聞』には「十年振で復活した　人類學の講座　學閥の關係から不遇でゐた　鳥居龍藏博士が主任」と，見出しが踊った。地元では『徳毎』が29日付けで同様に報じる。『有史以前の日本』（鳥居龍蔵　1918）のベストセラーで世間的にも有名となった鳥居の絶頂期でもある。一方の『日日』は2月3日「鳥居博士　近く来県　徳島本町カトリック教会宣教師招き」と帰郷情報を早速報道した。

3月27日鳥居の帰郷が実現した。午前6時30分阿摂汽船で小松島港に帰着し，幟町三丁目鳥居氏宅に投宿した。森敬介，前田正一，笠井新也，井上達三，曾木嘉五郎等が出迎え，午後は勢見山山上の古墳と椎の宮附近の踏査を行った（『徳毎』28日付）。佐古から蔵本駅周辺【2－6②④】にも足を延ばした。出迎えた地元有志は「旧友井上市会議員，曽木商業会議員，本社員小川國太郎」「県考古家笠井新也氏」「佐古尋常小学校訓導森敬介氏」（『日日』28日付）という立場の人々であった。

また【1－33】の7点に該当する「左は前田正一氏の博士来県を機とし新に理科大学人類学教室に寄贈の石庖丁，鎗石，弥生式土器の発見地なりと△名東郡八万村下八万恵解山西隣ノ山▲同郡上八万町字山ノ上（城跡）▲同郡下八万村字市原慈眼庵東南丘上（以上大正三年発見）▲加茂名町字三谷佐古尋常校裏道を六二連隊兵営に通ずる道路の北側椎宮神社東北方（以上同七年発見）▲美馬郡脇町中学校東北方丘上▲香川県三豊郡勝間村道音寺天神山麓（同十年十一月発見）」（『日日』28日付）という記事もある。

3月29日は徳島線江口駅から三庄村（現東みよし町）のお花権現，金丸八幡神社の磐境，長善寺の仏画，対岸の三野村（現三好市）勢力の館山を回って，脇町の笠井新也宅に宿泊し，脇亀太郎脇町中学教諭の採集石器等を実見，30日脇城跡を踏査した後，転じて小松島町（現小松島市）中田貝塚を視察した。31日は鳥居が翌月の英国皇太子説明のための原稿執筆で見学は休止，4月1日は堀江村（現鳴門市）池谷から土御門上皇火葬場，姫田大森荒神社・大谷東山谷・山田などの貝塚，東林院の塚穴・仏像，勝瑞城跡などを見学した[(7)]。同行者は出迎えたメンバーのほかにも『徳毎』の斎藤聖蛙や，田所眉東，笠井藍水，宮田竹三等の郷土史家が日替わりで加わった。

2日（日）は午前中眉山南麓の貝塚巡り，午後からは新町小で講演会と歓迎会があった。大阪毎日新聞通信部・阿波名勝会主催[(8)]の講演会は，同所に展示された考古資料を観覧していた300人あまりの聴衆が午後2時より講演を聴いた。笠井新也の「石器時代概論」，鳥居龍蔵の「阿波に於ける有史以前」[(9)]を午後4時45分まで熱心に聴いた。その後，菅館で約50名（『徳毎』5日付）が参加する歓迎会が開かれた。発起人には川越壮介知事ほか県政界・経済界・阿波名勝会などの34人が名を連ねた（『徳毎』1日付）。

(2) 調査の経過

さて，いよいよ城山貝塚の発見である。以降は日付にしたがって新聞報道や笠井新也，森敬介の記録を中心に当時の記録をまとめていきたい。

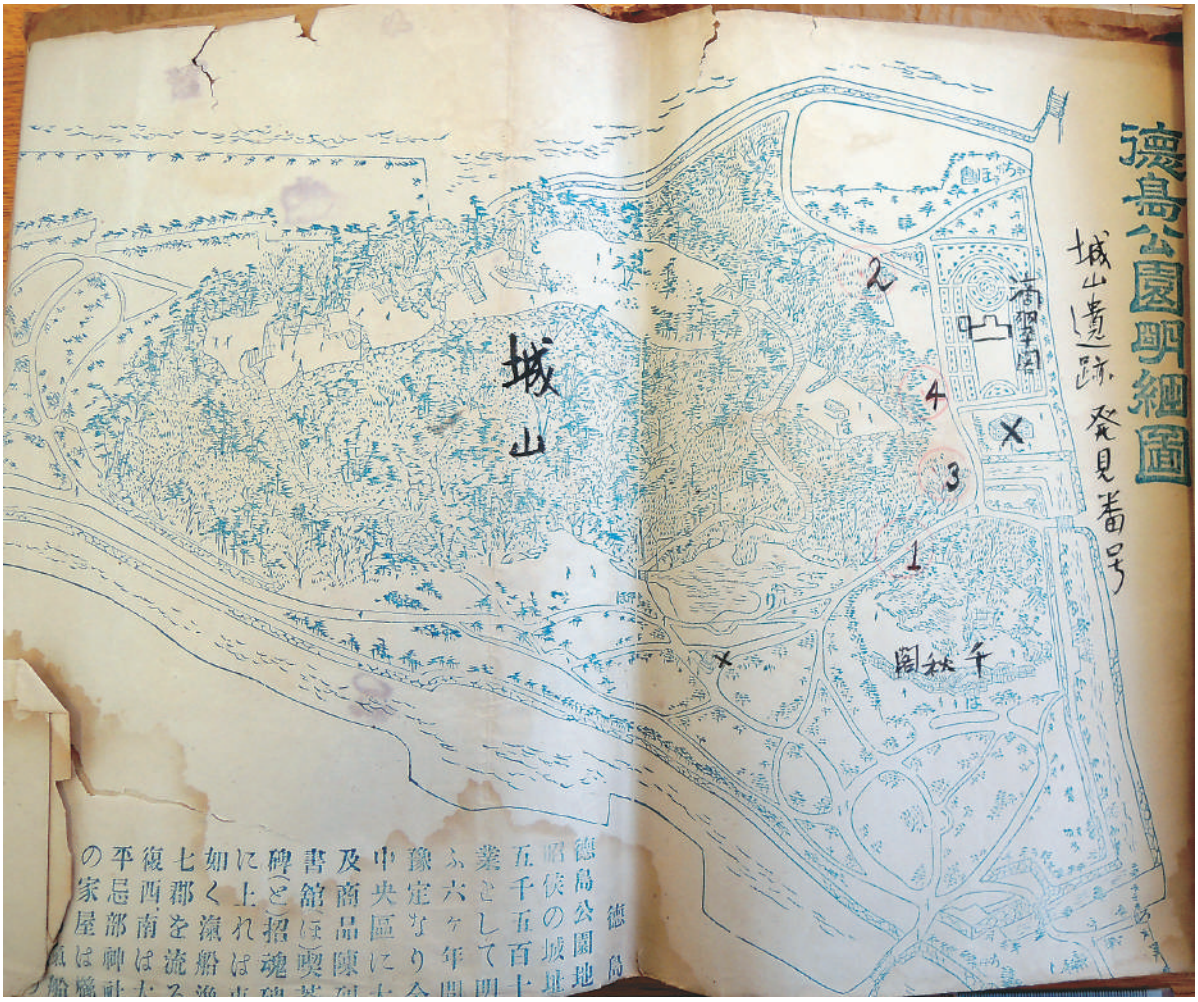


図16　前田正一が当時の徳島公園図に貝塚位置を記入したもの
数字は第１号貝塚～第４号遺跡の概ねの位置を示す。「千秋閣」「滴翠閣」のメモもある。

４月３日（月）

第１号貝塚の発見

昼頃まず城山頂上に登り，その後「千秋閣裏手に当りの巨岩の下なる道路沿いを約一尺発掘した処多数の海水産の貝殻が現れた。貝は二寸五分の蛤貝を主としカキ貝，アサリ貝，マキ貝，アカニシ貝，アカ貝，シリダカ貝等で，弥生式土器も共に出土した」（『徳毎』５日付）。

「而して少くとも一尺五寸の厚さがあることが分った。土器な上層の方からヤヨヒ式らしき（たぶん後世のカハラケ）ものが出た」，「段々掘下げて行く内にアイヌ式らしき燻黒褐色の石器時代土器が二片ばかり出たので 愈々これが古代の貝塚に相違ないことが分ったのである。」（笠井新也　2010：30）

４月４日（火）

第１号貝塚

「勇躍して更に城山貝塚の調べに着手したのである。まず例の労働係の前田氏は昨日の穿穴箇所から五六間東方に離れた所で道路から離れた山裾を二尺程掘って見たが何物も出ない。一同は大に絶望の体で」（笠井新也　2010：30）あったが，第１号貝塚の範囲の一端がわかる。

第２号貝塚の発見

周辺を引き続き踏査し，滴翠閣前花壇上より約５間の山麓で森敬介が午後３時30分「地下五寸強の処にて蜆貝を掘り当て，なお哺乳動物の脊髄・肋骨・腰骨を得，更に掘り下げる事二尺に及び続々多量の牡蠣・蛤・鹹水産の貝殻，弥生式土器及びややアイヌ派の臭味を帯びたる土器【003・1 － 8】を発掘した。」（『徳毎』６日付）

『日日』も「アイヌ式手法の気分ある土器に弥生式土器，哺乳動物，肋骨，腰骨其他多数貝殻発見」「貝種は鹹水産の　蜆，キサゴ，タマノコ，セタシジミ，大和蜆，潮吹キ，アサリ，イガイ，蛤，蠣，馬ノ爪，巻貝，赤ニシ貝」（6 日付）と出土遺物を詳細に報じた。

笠井新也は「森氏は穿穴的に更に掘下げて行くと貝層は次第に厚くなる 同時に石器時代の土器片がぽつぽつと出る。人骨の破片 猪の骨片なども出る。そこへ鳥居博士も駆付けて大に激励される。」（笠井新也　2010：31）と当時の様子を描写した。

森敬介自身は，「斜にヒサシ状をなせる地点を観て」「水平に奥狭りて，一坪余りの広さある此入口の中程を僅か四寸程掘ると，大きな蜆貝を初め，カキ，蛤か出だした。□□から奥へ一坪の広さで，僅か五寸程の間隔で，天井石で地面に併行して存在し，奥に接して蛤一個を認めるではないが，尚続けて行くと其他ハヒ貝等を初め，猪の骨や鰤の骨，アイヌ派土器の帯状に凸起して爪形ある模様のもの【003・1 － 8】，及人骨の胯の骨の一部など発見し」（新　1983：19）たと当時を振り返る。

【縄文土器 1 － 8・422，獣骨等 1 － 25 ①～⑤・428・429・430・434・435，貝類 451・452】

第 3 号貝塚の発見

前田正一は城山東南隅の洞窟内で午後 4 時 20 分「地下二尺の処で一岩塊を跳ね返した処が無数の貝殻及び哺乳動物の脊椎骨を得，なお牡蠣・蛤・バイ・クマノコ貝・アカニシ・サザエ等の貝殻，弥生式土器及び弥生式と少し異なる土器」，「弥生式にと似たる土器なるも上縁に小突起のある【001・5 － 32】」（『徳毎』6 日付）土器を発見した。

『日日』は 6 日付で「大阪より博士の電報での連載中止要請」があったとし，新町小学校での講演録「有史以前の阿波」連載を中止した。

笠井は「前田氏はまず入口から一丈程奥の所で北側の岩壁に添った所を一尺程掘って見た。すると忽ち大きな結晶片岩の剥片にぶつかった。そこで自家使用人の助手を使って金テコでこれは掘り起して取除け，更に掘下げて行くと地面下二尺二寸にして漸く貝層に達したので，これに力を得て前田氏は家業上お手の物の鉱山用のガス燈を二箇灯して貝層をかき出しかき出し掘り進むと石器時代土器が一片，二片，三片と続出した。」（笠井新也　2010：31－32）と記している。

また，森によれば「前田氏は，自分の発見せし附近の岩蔭を初め，探索し遂に昔より一般に伝説的横穴として知られたりし洞窟の中に於て発掘を試みし結果，ここも亦貝塚の発見になり，有力なるアイヌ式土器の出土により確実なる證跡を握るに至った。」という。（新　1983：19）

【縄文土器 5 － 32，421】

4 月 5 日（水）

城山遺跡調査のため「五日，市より東京帝大理科大学長五島清太郎氏宛」に鳥居の出張を依頼した。

「早朝より井上市会議員，森敬介，前田正一の三氏は各種の土工器を携へ旧城の下調査の為め発掘に着手せるが，市は岩窟其の他の要処に掲示板を立て猥りに侵入発掘の禁止を為す事となれり」（『日日』7 日付）

第 4 号遺跡

また「貝塚土器続々発掘　　徳島公園随所より　五日，井上市会議員の手に滴翠閣西方，岩窟下三尺にて各種の貝塚及び古代土器，徳島駅裏旧龍宮浜附近大楠下にて貝塚土器【1 －16】，滴翠閣中央西隅森敬介氏発見地より五間下がって発掘，貝塚土器を得」たとの記事（『日日』7 日付）。【1 －17】

第 5 号遺跡

一方「渭山は全部貝塚か　笠井氏は山頂　で又復貝塚を発見した。」（『徳毎』8 日付）との見出しのように，笠井新也が城山頂上北側部において貝殻散布箇所を発見した。

4 月 6 日（木）

井上が 5 日発見した土器などは「六日夜何れも理科大学人類学教室宛発送」（『日日』7 日付）した。

4 月 7 日（金）～ 17 日（月）は，前田正一が 7 日に三野村勢力大塚付近の杉の宮で縄文土器とみられる土器片を発見した記事「三好郡三野村にも　アイヌ土器現はる」[10]（『徳毎』20日付・『日日』21日付），17日に「徳島眉山麓　瑞巌寺境内の貝塚　森前田両氏発掘」（『日日』19日付）の外には，鳥居の新町小学校での講演録，前田正一の連載以外には城山関連の記事はなく，鳥居は浜松蜆塚の発掘，英国皇太子対応と徳島出張の準備で過ごしたものと思われる。

4 月18日（火）

翌日に迫った鳥居の来徳に先立って『徳毎』に記事が出た。「鳥居博士の貝塚　徳島公園研究地へ立札」の見出しのもと「博士の調査の価値ありと認められた千秋閣裏二箇所，西の丸入口大楠ノ下一箇所，滴翠閣西手二箇所の都合六箇所」の調査について，徳島市の依頼に帝大の返事があったこと，十七日夜博士東京を出発予定であること，立入禁止の立て札設置したことが記された。

4 月19日（水）

「鳥居博士は再び来徳せられ，先づ第一着に洞窟内より発掘せんと摘翠閣の一室を事務所となすなど，夫々の部署を定められ」（新　1983：19），市の幹部等と面会するなど（『徳毎』20日付），翌日からの調査開始に備えた。

4 月20日（木）

第 3 号洞窟貝塚

新聞報道による発掘状況は「巌窟内の貝塚　続々石器，土器，骨，貝発見」二十日より詳細調査，「千秋閣裏東口の大岩窟内は意外の大貝塚で岩石を掘下げて探るほど多数の土器，骨，石器，貝等が現れるので，多数の人夫を督して岩石を搬出し四尺から掘下げて調査中である。」「同所は見物人多数の為，柵を設け市役所はその他四ヶ所の各貝塚への制札を立て柵を施してある。」貝類は水産試験場に託して種類の調査中で，出土遺物は「土器（アイヌ派），石器，獣骨（猪），ハイ貝，蛤，蠣，ヒバリ貝の同類（ウス貝に似た），バイ，シジミ，シオフキ，カガミ貝，タニシ，アカニシ，ニナの種類，アサリ」（『徳毎』23日付）であった。

「鳥居博士は脇中教諭笠井新也，井上達三父子，森敬介，前田正一等」と発掘に着手し，「世界的価値と鑑定する城山調査の論文を日本文，外国文にて東京帝国大学理学紀要に発表することとなった。」（『日日』21日付）

笠井は「前田氏は森氏と共に穴内を測量して両側の岩壁にペンキで符号をつけた地平線や尺度などが白ペンキで明瞭に記された。」「小空地には無数の岩片があるので一つ一つこれをこねあげたり担出したりしなければならない。」「博士の指揮によって大きな岩石は成るべくそのままにして位置をかえないようにして土と小石片のみを取除くことにした。」「この日は穴の内外共に貝層に達しない。穴内には結晶片岩の大岩片が磊々として横っている。それが言い合わせたように奥の方に向って頭をもたげている。一見波濤状をなして並んでいる。これらの石片は多く天井のより落下したり側壁が剥げて倒れかかったりしたものであろう。」（笠井新也　2010：32－33）とみていた。

森敬介も同様の観察で「市川敏雄，田所市太，笠井藍水諸氏も手伝われた。此の洞窟の入口は，最初僅かに身体を屈めて入る程で，洞窟内は細長く，天井は高く，薄暗い所であった。」「窟内の状態によって入口の方から，だんだんと奥へ北側に沿ひ掘り初め，南側を作業上通路としたが，後になって此通路が偶然先住民の洞窟生活当時より通路たりしことが符切を含した様に発見せられた。」（新　1983：19）

4月21日（金）

第3号洞窟貝塚

「岩窟で二十一日に不完全な弥生式土器を発掘した」「岩窟内の大立石の前庭附近」（『徳毎』24日付）との報道がある。

「穴内の岩石を取除いて以前試掘した附近，即ち穴口から一丈の地点の北壁下を深く掘下げると果して貝層に達した。貝層は凡そ二尺ばかりである。土器がぽつぽつ出る。弥生式風の赭色の土器の破片も出るがアイヌ風の燻黒色のものも出る。併し大体からいうと，古式の弥生式とみるべきものが大多数である。一方，穴外の小空地の正面にあるテーブル状の平石の下からも貝層が表れ始めた。その貝層の少し上から弥生式の破片が出た。」（笠井新也　2010：33）

【縄文土器5－14・5－21，獣骨5－28】

4月22日（土）

第3号洞窟貝塚

「二十二日の午後更に完全なの（弥生式土器【006】）を一個発掘する事を得た」とあり，「岩窟内の大立石の前庭」で「高さは八寸ばかり周囲が二尺三寸二分，頗る見事なもので，弥生式の一特徴たる大黒斑も鮮やかに見られ」「新町橋畔の井上写真館の陳列所に飾って一般の人の縦覧に供する事にした」「石を掘り続けると下から椿の葉が一枚出た，葉緑色をまだ失っていない」【5－38】（『徳毎』24日付）

「穴内奥部の貝塚から土器片がボツボツ出るがその多くは無紋で，古式弥生式土器と見るべきもので，未だ正確なアイヌ式的特質あるものを出さない。但しその陶質は黒みを帯びたものが多い。さて奥部の貝塚を段々奥へ掘り進むと程なく底が地石になって浅くなって行く。従って貝殻層は浅く四五寸の厚さになって了った。そこに地面下一尺許の所で貝塚層の少し上部の貝交りの土中から一葉の椿の葉が剥石の下から出て来た。博士はこれは確に石器時代のものだと云ってやかましく喜んで測量をさせたり写真を撮らせたりした」「一方口外の巨石の下部の方の掘鑿もだんだん進んでゆく。その巨石の下の貝殻はカキが多い為でもあろうが巨石に壓されたものが非常に硬く固まって壓せている。これを小鍬で掘って行くと貝殻はボロボロになって落ちる，段々掘り取って行く内に貝殻は尽きて了った。

もう午後四時も大分過ぎてそろそろ仕事を中止しょうとしている時であった。」「見ると例の巨石と岩壁（北）との間の下部に大きなヤヨヒ式土器の壺が現れている。今鍬でもってその腹部を打壊した所であった。そこで大勢大騒をして周囲の土を去って掘り出した。略完全なもので高さが凡そ八寸ある。」（笠井新也　2010：33）

【獣骨1－20】《図101b・103》

4月23日（日）

第3号洞窟貝塚

「折柄の春雨にかかわらず博士一行は濡れ鼠となって岩窟内に人夫を指揮し掘鑿を進めしが午前十一時頃断岩片三尺下に時代古し大鮑の片貝と弥生式土器並びに皮剥ぎの石器遺物を採集せるが一般貝塚及び海岸岩窟内に大鮑の古色蒼然たるを得たるは稀」とあり，一方「知識階級の岩窟訪問」見学者も多数ある（『日日』24日付）。

4月24日（月）

『徳毎』がこの日1面で「アイヌ派　土器破片の図」を掲載した（図1）。城山貝塚3点，勢力村1点，前田正一提供スケッチ図。イは第3号洞窟貝塚最初の発見となった波状口縁の深鉢（現品は東京大学総合研究博物館所蔵【001・5－32】），ロは口唇刻目の深鉢【002】（現品不明），ハは第2号貝塚最初の発見である凸帯文土器（現品は同所蔵【003・1－8】），ニは弥生時代前期の体部凸帯とみられる。

第 3 号洞窟貝塚

「暴風雨にも怯まず」「前日に引き続き作業を試むる事となった」排土が雨に洗われ「サヌカイト（讃石）が露出していた」のを採集したため，土砂を篩にかけることとした（『徳毎』25日付）。

「午後に打製石斧一個並びに錘石」が発見された（『徳毎』26日付）。

またこの日，母親の死去で櫛渕村（現小松島市）に帰省していた喜田貞吉が「午後六時頃公園岩窟に鳥居博士を訪ね窟内に入り詳細の説明を聴取した」（『日日』26日付）。

4 月25日（火）

第 3 号洞窟貝塚

「打製石斧石鏃並に磨製から打製に移った石斧を採集するとともに古色を帯べる土器の破片を多く発見せる上に動物骨，魚骨も併せて獲得した」（『日日』26日付）

笠井新也は雨で 2 日間現場には赴かず学校にいたが，「昨日出たといふサヌカイトの破片を見た。一は井上達三氏が得たもので二寸五分許の破片，一は森敬介氏の得たもので一寸程の小片であった。尚石斧に似た扁平な川原石も陳列されてあった。」「二日見なかった間に窟内の発掘がよほど進捗している。奥部の中央に大きな表面の平な石が出ている。博士はこれは食物を調理した台石かも知れない。その表面に何か打ち凹められた所などはないか見てくれとの事であったので予は人夫を指揮して石の表面をよく縄麻で洗ってみたが，人為的摩滅の痕跡は見ることを得なかった。」

「最奥部の狭窄部もよほど土が掘除かれて古代の状態に復元されている。この部は二尺五寸乃至三尺の幅があるので，恰も一人が横って寝るのに都合がよいという所から博士は，ここは寝室かも知れないといわれた」「その部の北壁下が岩石が自然に棚状をなしている。その上で森氏は西瓜或は梨の種らしき木実を発見した」「この狭窄部からもヤヨヒ風の土器片が少し出たそうである。」（笠井新也　2010：34）

《図 97b》

4 月26日（水）

『日日』に完形で出土した弥生土器の写真が掲載された【006】。

第 3 号洞窟貝塚

「一段落つけた　岩窟貝塚　内部は奥へ石段のような，岩石の配置，食卓のやうな石も真中にある」との見出しで洞窟貝塚のほぼ完了を報じた。入口の岩石の角から奥までは三十尺である。（『徳毎』27日付）

「窟内の土は殆ど全部外へ運出された。」「入口から十尺の右側壁下の貝殻層の尤も深い所（自然に岩底が凹くなっている為）では，もとの地面から四尺以上掘下げられた。表土二尺下貝層二尺が掘下げられたのである。その少し手前に橋のやうに横たわっている巨石があって，その手前入口から三尺の所にも深い貝層があって，ここのは土壌が少くて殆ど貝ばかりの状態である。殊に例の橋状をなした巨石の下がトンネル状に掘られて行くと全く土に触れていない新しい貝（主としてハマグリ）が堆積している。

一方出口の方も北壁下がだんだん掘下げられて もとの地表から四尺（穴内の貝層と略同水平）の深さで貝層が表れ出した。やはりそこからは内部と同じ黒土層になっている。蓋し貝塚はすべて北壁に沿うて堆積されているようである。」（笠井新也　2010：34）

4 月27日（木）

『徳毎』も完形の弥生土器壺の写真を掲載した【006】。

第 3 号洞窟貝塚

「博士は洞窟の入口より一二尺の貝塚発掘の跡よりサヌカイト石庖丁を発見された，大きさは原形の二分の一尖端に属するものである同時にアイヌ土器の破片が復た出土した。」「午後は巌窟前面道路

に向って発掘を進めたが此処では緑泥片岩の石斧が続々と出土した外，山土約四尺を掘り下げた所で三寸許りの厚さを有する真土に木片【1 －29】が散在し，比較的大なる鉄釘【1 －31】が左右八九寸の間隔を置いて十尺ほどの間に二十三四本も二列に並行して打ち込まれてあった。」（『徳毎』28 日付）《図 67・69ab・73bc・75a》

4 月28日（金）

第 3 号洞窟貝塚（大巌窟）前庭部の発掘継続と，第二号貝塚（滴翠閣花壇西）に作業着手した。

第 2 号貝塚

「異例続出の公園貝塚　第二貝塚から人骨　石斧，石庖丁は続出」との見出し，「第二貝塚では緑泥片岩の石斧，石庖丁の外に人体の骨盤の一部及び南面して伏た頭蓋骨が発れて写真器を持ち込むやら発掘を緩くするよう大騒ぎを演ずる他にも色々出土した筈であるが」「人骨は古色濃やかにして海綿質となって了って居た。」また，「鳥居博士は東京帝大教授医学博士小金井良精氏に対して電報を発して其の来否を問い合わせた。」（『徳毎』29日付）

「この方は発見者の森君が主として調べにかかったが，忽ち人骨の頭部が現れたので，」「発掘は小金井博士の来着まで そのままに置いて，主として第三の方の調査を急ぐこととした。」（笠井新也 2010：35）

「正面の岩壁に接したる所より，余は掘り初めしに，緑泥片岩質の石鏃と思はるもの出で，続きて頭蓋骨の破片の現出に注意しつつ掘るに従ひ，弥々頭蓋骨に左腕骨を認めらるに至り，頭には枕石をなし，当頭上より何れも緑泥片岩製の石斧一個，及大なる石匙ともいふべき石器二個出で，無紋の土器片も腕の間などから出でた【1 － 5】。第二号貝塚と第三号貝塚と土器を比較しても，第二号の方の位圧せし跡ありし，打先分に認めらる。」（新 1983：20－21）《図 13・15・37b》

第 3 号洞窟貝塚

「第三貝塚道路面の巨石遺跡（メガリックモニュメント）側底の珍物は中古時代現今の城濠に巌窟内の瀦水を排出した木製の樋らしいと鑑定」，「洞口の巨石の四隅には」弥生式土器が「西南隅に樋に接して一個，東北隅岩石の間隙に二個，東南隅には同器の破片が出て来た。なお東北隅の間隙中にはヒラカ（弥生式の皿）【5 －33～37】が多少出土した。」「祭器が四隅に存在するより判ずれば墓石であったものか祭式に利用されたものかは疑問であって同日調査完了の見込みであったものを更に岩下に掘鑿を開始しだした，尤も博士の談によれば附近の土器は貝塚時代より時代を新しくするものであるという。」（『徳毎』29日付）

『日日』は木樋について「側面に露出せる花崗石により断定され時代は足利時代のものならんと，発火器の抑え石は一昨日薄暮の頃発見之は石器時代に珍しき石器なり其の他藩公時代の趣味的玩弄（戎の鯛釣り）陶器，遊戯石（瓦製）」（29日付）と報じた。

「今朝の新聞によって昨日岩窟内からサヌカイト製の石庖丁が発見されたということを知った。今まで石器に類似した石片や川原石は沢山出たが純粋の確実な石器は何一つ出ていなかったのであったのに，石庖丁の発見が事実とすれば重要な資料である。元来この岩窟から出る土器は多く無紋であって，中には燻黒色のアイヌ式らしく見えるものも出るが，また赭色のヤヨヒ式らしいものも多い大体からいうと古式のヤヨヒ式土器が大部分を占めているように思われる。それで確実な石器が出ない以上は，それが果して石器時代の貝塚であるか或は少し新しいヤヨヒ式の貝塚であるかも 未だ岩窟に知るべからざる状態にあったのである。」「滴翠閣の休憩室兼発掘物整理部に行って例の石庖丁を見た。それは石庖丁といふ普通の模式的のものではなく，また破片には過ぎなかったが，ともかくもサヌカイトの薄片の周縁に刃をつけた一種の利器に相違なくやはり広義に石庖丁といって差支のないものであった。これによって窟内の遺跡の性質は確実したものといって可からう。

但しこの石器の出たのは貝層中から出たのではなく既に不用の土として穴外に放り出してあった土堆の中から鳥居博士が発見したもので，その土の出所を調べてみると，岩穴入口より一二尺の所の貝層よりは少し上層の貝交りの土中より出たものであることが分ったということであった。」「整理部を

辞して岩窟前に行って見ると例の出口前のテーブル状巨石の上に博士が立っていた。博士は予を見る直に昨日の石庖丁発見を語ると共に 今朝 例の巨石の周囲からヤヨヒ式の土器が出たといって，そこに紙箱に採集したものを示された。而してこの巨石がかねて予想していた如く一種の巨石遺跡（メガリレックモニュメント）であることを話された。但しそれらのヤヨヒ式と称する土器破片は古墳時代若しくは平安頃の小形の皿（杯）であった。」「尚昨日は巨石の下方四尺の所から その南側から東方に向って五六寸大の鉄釘が並列して出たこと，それが岩窟から城湟に向って造られた藩政時代の樋の跡らしいということも話された。」「併し第三の方も窟内の方は 殆ど掘り尽して了ったので主としてその口外の巨石の周囲を深く掘下げることとした。」（笠井新也　2010：34－35）
《図 71ab・73a・77a》

4 月29日（土）

第 2 号貝塚

第二貝塚に頭を南向けにして臥した少年の人骨を二個発見した発掘隊は二十八日夜不眠の見張り（森・前田・井上子息）についていた。第二貝塚は小金井博士が来県されるまで当時のまま保存の状況である。（『徳毎』30日付）

第 3 号洞窟貝塚

「巨石の下方周囲が段々深く掘下げられた。その北方岩壁との間の土石の取除かれた。かくして巨石の下部が巨石を蓋石，或は，押へ石状としてドルメン形に掘り残された。而もその下部西南部の底石四五箇がやや梅鉢状に列っている。博士はこれを以て人為的に配列したものとして，いよいよこの巨石遺跡が一種の墳墓であることを熱心に語られた。その巨石を東方から支えている石は上方が大きくて下方が小さいので非常に巧妙な手法で朝鮮のドルメンにその例がある。それで，これは時代は石器時代より少し新しいようだが ともかくも一種のドルメンだと主張された。而してその下方の梅鉢形に並んだ石は一種のストーンサークルであると語られた。而してその底部には必ず人骨か或は壺かが出るに相違ないと期待された。そこで井上達三氏は博士の意を承けて，その底部に向って小孔を穿って内部の消息を探ったが，それは ただ鬆に堆積している海砂ばかりで何等遺物を發見しそうでなかった。また巨石の北部もだんだん堆積している岩片を取除いて見たが，何等人工物形跡を認めることが出来ない。」（笠井新也　2010：35－36）《図 77b・79b・81a・83ab》

4 月30日（日）

第 2 号貝塚

「小金井博士は四月三十日夕刻到着せられ，直ちに城山第二号貝塚吋現場を予察せられ」（新 1983：21）た。

第 3 号洞窟貝塚

「巨石遺跡は三十日に至って愈々ドルメンと断定された。最下底は桜花状にストーンサークルが直立し，其の上にケールン状に岩石を蓋とし最上部に一枚岩を据えたもので我が国では目下唯一のもの」と大々的な報道があった。午後から巨石遺跡の底部掘削。（『徳毎』5 月 1 日付）

第 4 号遺跡

「第四号貝塚（滴翠閣の真西巌下に在る）は両三日以前より折節発掘していたが，三十日午後六時頃初めて貝殻の外に弥生式土器（壺）の裂け目が縦横に走って」いるものを掘り当てた。（『徳毎』5 月 2 日付）《図 105a・107b》

5月1日（月）

第2号貝塚

「森敬介を助手に鳥居博士立ち会いのもと」，小金井博士の人骨調査。「土質が軟らかい上に二千年以上経たと思われる骨格は持つにも危い程軟弱な海綿質となって居て動もすれば壊れんとするために正午迄には既に一部分見えて居る頭蓋骨と下肢骨の掘り出された外に膝を左曲げた下肢骨一本が現れた許りに過ぎぬ，頭蓋骨の附近には石斧，装飾用の石，石庖丁各数個緑泥片岩製の石鏃らしき者弥生式土器破片各一個が頭骨を詰めた小石の中で発掘された外稍離れて貝環（蛤製の腕環）【4－1①②】の二分一大の物が拾い出された。」「聞く所によれば頭蓋骨は年若き婦人のものであって下肢は若い男のものらしく膝を屈して居る」（『徳毎』2日付）ので屈葬と判断されたようだ。

「第二貝塚へ行ってみると小金井博士は既に手に竹箆を取って巻脚絆のいでたち，かいがいしく人骨の発掘に着手されていた。左上膊前膊が露れた。それを取って更にその附近を探る探る掘って行くと脊髄から大腿骨，骨盤，右上膊前膊，脛骨等が段々と露出した来た。骨格は非常に頑丈で大形らしい。」（笠井新也　2010：36）

「人骨の発掘に着手することになったが，鳥居博士は特に余に助手を命ぜられ，小金井博士御指導のもとに竹箆の刷毛等を以て手伝をした。」「完全に屈葬の状態に埋められ，頭部は北に，顔面は西の岩壁に向ひ，胸部は仰向となり，足部は南方にあるを認められた。博士は一部分□□箱に収められた。尚此の北側の天井石の水平にある下より，足の大部分及肋骨等を発見したが，足部は殊に腐蝕甚だしく，僅かに基形態のみを認むるに過ぎない状態で」（新 1983：21）あった。

【縄文土器1－5①②③】《図 17ab・19・21b・23a・75b》

第3号洞窟貝塚

「第三貝塚即ち岩窟の方でも所謂ドルメンと北壁との間に黒土層が現れて貝塚がある。土器もボツボツ出る。窟内は昨日博士の意見で石器時代当時のの状態を示すために南側の方に少し土を盛って通路，或は居所を作り，右方北側に貝殻を捨てておいてあった。かくて岩窟の調査は一段落を告げた訳である。但し例の所謂ドルメンは底部の調査を大分進めて見たが得る所がない。」（笠井新也　2010：36）

第4号遺跡

「一日には同様の式の壺の破片が多数発掘された。」（『徳毎』2日付）

「第四貝塚（実は貝塚にあらず）からは井上氏の熱心なる発掘によって各種のヤヨヒ式土器を出した。中にも高さ約五寸の壺が逆様に埋められていたのは珍しい発見である。その他甕の破片，杯の破片等も多く出た。何れも古墳時代のものであるらしく，その或物には明らかにロクロの痕があった。」（笠井新也　2010：36）

【須恵器 202】《図 105b・107a》

5月2日（火）

第2号貝塚

「人骨は葬られた儘　の者で而も大人の骨格」「午前九時三十分より小金井博士指揮の下に森・前田両氏が原形を崩さじと懸命に慎重の態度をもって骨格に付着する土塊小石の除去に着手した。発掘の進捗するに随って発見当初の児童説は破砕される。即ち土壌の撤去された順序は頭部，左手，骨盤，右足，脊柱，肋骨，左足，右手であって，年は古く土石に圧せられ木の根お浸入によって各部の崩壊，不足によって諸種の説を生むに至ったものであったのである。小金井博士は指さして「何分年代を経たものであるから，何方の部分も海綿質となって居り，且つ幾分か不備の点はあるが，葬られた時の形体は頗る明瞭である。見らるる通り脚を南に頭を北にして仰臥させられたもので，顔は西（岩石の土に□る方向）向けてあるが，腕は左右□□肘を向けて左右の脇の下へ向けてある脊柱を中央にして，それが肋骨と共に見えるのは即ち仰臥させたものと思われる。併し脚は膝を曲げて臀部から極度に前屈させてあるが，その脚は右足に倒れて居る。時代性別は手にとって詳密に検査した後でなければお

話しすることができない。」尚掘って行くと頭蓋骨は同様大の石を枕とし（前号に頭蓋骨をとり出したとしたが危いので中止して発掘を続けたのであった）周囲に処々貝殻が重なっていた。斯くして中食□注意に注意を加えて部分部分」の採集をしたが腸骨などは完全に近いものであるが篦で掘り取るうちに粉の様に崩れる処も出て来た。下肢骨のみ見えるて居たもう一体は肋骨などの小片が数個出たばかりであった」（『徳毎』3 日付）《図 21a・23b・25・27ab》

「採収の人骨は日陰に乾燥させて両三日中に博士の手元に送付することに為っている。精査の結果は帝大の紀要に独文で発表されると云う」（『徳毎』4 日付）。小金井は 2 日夜，帰京した。

第 3 号洞窟貝塚

「巨石遺跡の裏側岩壁沿いからは貝層のうちからサヌカイトの細片が一箇出た。」（『徳毎』3 日付）《図 81b・83c》

5 月 3 日（水）

「鳥居博士の帰期迫る　各貝塚続いて発掘　有史以前の阿波が漸く分る」「降雨続く三日も三隊に分かれて第二，第三，第四の塚並びに其の前庭を開掘調査する。」（『徳毎』4 日付）

第 2 号貝塚

「純粋アイヌ式　縄紋土器出づ　城山第二貝塚より」「三日午後二時三十分，主力を第二貝塚に集注して人骨を発見した岩窟の前斜面を発掘する時扇状形になった厚さ約二尺の貝層を五寸許り掘り下げた時，井上達三氏の手によって関西にては只備中の津雲に発見されたばかりの純粋アイヌ式縄紋がある黒焼き土器破片【004・1 －12 ⑧】が発掘された。」「縄紋入りは勿論最初であってアイヌ人の生棲して居たことをこれで愈々確証されたのである。長さ一寸四分幅約九分の小片。」「赤焼アイヌ土器破片も続出して居る。」「第二貝塚は巌窟の前方二尺の箇所から鉄器の破片約一寸のものが出た。」（『徳毎』4 日付）

「第二貝塚の発掘に全力をそそぐこととなった。貝層の少し上から鉄の壺形の破片【1 －32 ②】が出た。いかにも土器の壺とそっくりである。博士はこれを重要視して採取された。」「その他ここから出る土器は縄紋以外のものもアイヌ式気分がきわめて濃厚である。

鳥居博士は第二貝塚北接の巨岩の周囲並に附近を頻に発掘してそれがやはり一種の巨石遺跡であることを証明しようと試みられたが何の得る所もなかった。」（笠井新也　2010：36－37）

【1 －12 ⑧・310，石器 437】《図 29b・31・33a・39ab・41ab》

第 3 号洞窟貝塚

「第三貝塚は前庭巨石遺跡との中間，北巌壁添いを掘鑿すると二三尺も深さのある貝層となって居てアイヌ土器の破片が数個露われて巨石記念物下の海砂にまじる貝殻とともに，ドルメンを築いた時代以前，地質時代との間にアイヌ族が穴居生棲して居た」。（『徳毎』4 日付）

第 4 号遺跡

第四貝塚は貝殻多数，「弥生式の壺の大小約三種，食器等二三種の原形の儘のもの」（『徳毎』4 日付）

5 月 4 日（木）

「四日午前中は第二貝塚の貝層を発掘すると共に幹部は市下助任町弘誓寺裏の開墾地に発見せられた貝塚の調査に向かった」（『徳毎』5 日付）。

第 2 号貝塚

「城山貝塚から　更に人骨発見　四尺に近い貝殻層の中から」「午後四時過ぎに至って巌窟の前方（東）五尺五寸程の，人骨の発見した地点より二尺三寸下がった箇所即ち四尺に近き貝層の中央より又復アイヌと覚しき人骨の下肢一本【1 －22】と頭を東南に向け横臥した，深く膝を屈め込んだものを発見した。小金井博士の発掘方法にならって前田，森両氏は竹篦を小かに動かして付着する土壌，貝殻を取り除く内に薄暮」となった。（『徳毎』6 日付）「第二貝塚はアイヌ式土器網の錘，桃の葉大のサヌカイト打製石庖丁が出た。」（『徳毎』5 日付）

「サヌカイト製の石のナイフも出た。これがここから出た唯一の石器である。博士その他森氏等はしきりに石斧だとか錘石だとかいっていろいろなものを採集されるが，予はすべてそれらを以て偶然的石片と見るの外はない。この日また腰部以下の人骨一体が出た。これに前に出た完全なものと，その北方から出た不完全なもの（片腕，片足，チョー骨，骨盤破片 等）を加えて都合三体となる。動物の骨は，山猫？，猪，魚骨，その他が今までに 小片がボツボツ出ている。」（笠井新也　2010：37）

弘誓寺貝塚

下助任町弘誓寺裏の貝塚調査，これは「田所眉東氏が聞知し，鹿骨並びに祝部土器を採集してきた所である。麦圃中約二十坪，表土八寸，貝層の深度四寸より一尺余にして，カキ，ハマグリ，シジミ，アカニシ，ハイガイ，アサリ等，鹹淡両水産貝類七種の混合層であって，大なる鹿骨，弥生式土器，祝部土器の破片が無数に混じって居る。緑泥片岩製の石庖丁らしいものも発見された。」（『徳毎』5 月 5 日付）

【須恵質土器 1 － 32 ①・陶器 521・522】

大楠下龍王宮跡《図 7ab・43b》

5 月 5 日（金）

『徳毎』1 面に「アイヌ生棲　断定し得る材料　城山第二貝塚より続出す」との見出しで 2 個の縄文土器スケッチが掲載された（図10）【004・005】。

4 日に第 2 号貝塚で発見された人骨を保護するため「同夜は田所眉東氏が夜警をせられた。五日は人夫を交代監視せしめて見物人の立ち寄ることを禁じ主力は第四号貝塚に集めて発掘を急ぐ。一方滴翠閣では鳥居博士の同夜携えて帰られる発掘物の整理，撮影に幹事連は多忙を極める。」（『徳毎』6 日付）

「鳥居博士は今夜の船で一先帰られることとなったので朝から整理部は忙しかった。博士は主要な遺物を持帰られるといふので，森氏や前田氏は朝から記念の為に土器の拓本を取ったり，井上氏の子息は写真をとったりした。こんな風で発掘は甚だ不進捗であった。」（笠井新也　2010：37）

第 2 号貝塚

「前日来の発掘物は第二号貝塚のみで前に井上氏の掘った模様入り縄紋土器とは異なる縄紋土器七個外に無文土器の破片多数，川原石を其の儘利用した石斧，緑泥片岩を以て製した石斧三箇，石庖丁六箇を貝層深く採集した。」（『徳毎』6 日付）

「午後から発掘にかかって完全人骨の出た所から一直線に下方へ深い溝を作ってその断面を現した。その左方も横一文字に断面を現すように掘ってみた。そこには上層には殆ど大きなカキばかりの層があってその下にはハマグリばかりの層があった。ハマグリは頗る大きい。そのハマグリの一群には多量の木炭が交じっていた。またキシヨゴが一所にかたまって多量にあった。またそのハマグリの層中には多くの片岩が堆積していて一種のケールンとも見られる状態であった。

貝層の尤も深い所は厚さ四尺に達していた。縦に掘った南方の方は貝層が厚く多量であったがその北側は甚だ貧弱であった。五時前に一同作業を中止して記念の撮影をした。それには新聞記者なども交った。博士は愈々この夜の船で帰京された。」（笠井新也　2010：37）《図 33b》

5 月 6 日（土）

「石器土器の遺物を　滴翠閣へ陳列する」「鳥居博士帰京後の城山遺跡研究隊は依然整理と精査の作業を継続して居るが六, 七両日共第二号貝塚（花壇西方斜面）からアイヌ土器の破片，石器を多数発見し他の一部隊は第五貝塚（図書館西方大楠の下）に作業し藩政時代の卍のついた家根瓦，より少しく古い土器を多少発掘した。発掘物は市当局の依頼によって実物或いは其の写真を悉く整理の済み次第滴翠閣に陳列して一般の参観に供すると云って居る」（『徳毎』8 日付）

第 2 号貝塚《図 35a・37a・43a》

5 月 7 日（日）
発掘関係記事なし。
大楠下龍王宮跡【508・510】

5 月 8 日（月）
第 2 号貝塚
貝塚から発掘した人骨の鎮魂祭の計画が春日神社の早雲社司中心に議論されている。(『徳毎』8 日付)
「人骨足部と岩石の下から植物性椿の葉らしいものを発見」(『日日』8 日付）木の葉は柞木科のクスドイゲとの鑑定で城山にも自生する。(『徳毎』10日付け)
第 4 号遺跡
「八日には第四号貝塚（滴翠閣真西）から城山には絶無と想われて居た祝部土器の破片が発見されて居る」(『徳毎』12日付)。《図 123bc》

5 月 9 日（火）
発掘関係記事なし。
第 1 号貝塚　【縄文土器 505】
第 4 号遺跡　【土師質土器 205・206】《図111》

5 月10日（水）
第 2 号貝塚
「十日に至って第二号貝塚から燧石の打製石庖丁の破片が二個発掘された。」(『徳毎』12日付）(『日日』11日付)
【縄文土器 1 －12 ⑦・1 －24 ①・5 － 3・5 － 5，チャート製削器 5 －40 ④】

5 月11日（木）
第 2 号貝塚
「第二号貝塚（花壇西方城山東麓斜面）では十一日夕刻また現に漁業に使用されて居る立網の錘に酷似する紡錘形中空の土製網錘（長さ一寸三分，太きところ直径五分）【5 －42 ③】が一箇，些少の損傷もなく貝層より発掘された。」(『徳毎』5 月13日付)
「剃刀型石器発見　絵紋精緻の土器と　海亀か獣骨か疑問」「第二貝塚岩窟下を掘鑿後の土砂を篩にかけ居た整理部隊は昨朝（11日）今迄に他に例なきサヌカイト質にて巧妙に製作せる剃刀形の鋭き刃を有するナイフ発見」(『日日』12日付)
【縄文土器 319・320】
第 3 号洞窟貝塚
「第三大石棺より黒色を帯べる古代土器破片，然も絵紋の精緻なるは之亦未発見の珍品にして尚同所から海亀の足指とも或いは猛獣の歯茎ともつかぬ骨発掘」(『日日』12日付)
第 4 号遺跡　【須恵質土器208】

5 月12日（金）
第 3 号洞窟貝塚
井上が担当し「黒色の直線模様入りの祝部土器に石庖丁石鋸のものを発見」(『日日』14日付）した。
第 2 号貝塚　【縄文土器 1 －12 ⑤】
第 4 遺跡　　【擂鉢204】

5月13日（土）

「見学者の増加した　公園貝塚の整理　作業はまだ十数日かかる」（『徳毎』13日付）《図45・47》

第2号貝塚

「本県では最初である，長さ四寸の骨製の真直ぐな鈎（つりばり）を二本発見した，内一本は完全なもので三箇のかき込んで造った突起があるが他の一本は折れ損じて居た。」

「その後の発掘物と共に鳥居博士の許へ」送られる。（『徳毎』15日付）

第4号遺跡

「石棺から南二尺，地下三尺五寸の箇所より魚類の骨片三箇を発掘した．是で第二, 三, 四各塚共魚骨が発見された訳である」（『徳毎』15日付）

5月14日（日）～19日（金）は発掘関係記事はないが，出土情報と写真撮影がある。

5月14日（日）　第2号貝塚　【縄文土器209・212・214・315・334，石器327】《図95a》

5月16日（火）　第2号貝塚　【縄文土器117】

第4号遺跡《図113abc・115a・119a・123a》

5月17日（水）　第2号貝塚《図49》

第3号洞窟貝塚《図85a》

第4号遺跡《図115b・117b・121ab》

5月18日（木）　第3号洞窟貝塚《図85b》

第4号遺跡《図121a》

5月19日（金）　第4号遺跡《図119b》

5月20日（土）

第1号貝塚

井上が「第一号貝塚（千秋閣裏路面）の発掘を始めた」（『徳毎』21日付）。《図9ab》

第3号洞窟貝塚

「二十日は井上氏主として采配を振るい第三号大巌窟貝塚土壌より除去した土壌を篩に掛ける」「篩にはアイヌ弥生両派の土器破片が無数に掛かって居た」（『徳毎』21日付）

5月21日（日）

第1号貝塚

「二十一日も井上・森両氏が四名の人夫を督して第一号貝塚の発掘調査の手を進めて居た。同所は（略）鹹水産の貝類が数種入り乱れてその岩に壓し敷かれて居る，殆ど表土なしというも不可なく約一尺五寸の貝層で獣骨と思わるる厚さ一寸三分許りの海綿質と化した大なる骨片が十数個，外に鳥骨十数片，弥生式土器破片一箇，祝部式土器の細片一箇，鉄片五箇が出土した，此処には淡路石が夥しく混じって居る，以上は正午迄の発掘物であるが，予想外の珍種も出んかと大いに期待されて居る。」（『徳毎』22日付）

第2号貝塚　【獣骨1－23③】

5月22日（月）

第1号貝塚

「二十二日迄の調査によれば貝塚を壓敷く巨岩より前方間余殆ど道路の半迄も及び幅は二間を越え千秋閣の壁に接近するに随って表土は愈々厚く四尺以上もある前日来発掘の土器は総て古墳時代に属するものと推量されたが此の日は先に第二号貝塚に発見された鈎（つりばり）と観られた骨器と類形の鍵の着いた長さ三寸六分位のよく磨けたものが出土した。」（『徳毎』23日付）

【縄文土器227・503】

第 3 号洞窟貝塚

「大岩窟貝塚から扁平な石に押された儘発見された椿の葉は一応植物学界の権威帝大理学部教授三好学博士並びに同じく教授藤井健次郎博士の鑑定を求むる事となったと鳥居博士より情報があった。」（『徳毎』23日付）【桃核 512】

5 月 23 日（火）

第 1 号貝塚

「此の日第一号貝塚の発見物中にはアイヌ土器の底の内面に砂金の数粒が付着して居るものがあった。」明治初年までは吉野川の砂金は全国に有名，鳥居博士に急電を発した。（『徳毎』25日付）
【縄文土器 223・501】

5 月24日（水）～26日（金）は発掘関係記事はないが，出土情報がある。

5 月24日（水）　第 1 号貝塚　【縄文土器 216・217・221・222・228・229・230・231・233】
5 月25日（木）　第 1 号貝塚　【縄文土器 225・232・502・504】
5 月26日（金）　第 1 号貝塚　【縄文土器 224・226】
第 2 号貝塚　【縄文土器 1 － 2 ①②・1 － 6・1 － 7・1 －10・1 － 15・1 －30 ⑩・323・325，貝 1 －18・1 －19】

5 月27日（土）

「目下，井上氏発掘の第一岩窟も昨日に及び有力資料続出したが，之れと同時に調査の為掘削工事に従事せる雇夫は打切ることとなった」（『日日』28日付）
第 2 号貝塚　【縄文土器 1 － 1・サヌカイト 1 －30 ⑥】

5 月29日（月）

第 2 号貝塚　【縄文土器 1 － 9・1 －11，石器 5 －40 ⑤】

城山貝塚に関する記事・出土遺物情報はここまでである。

鳥居はこの年の 8 月に小松島の講演のため帰省，11月には東宮台覧のための帰郷と徳島人類学会や阿波名勝会顧問の用件も含め，これまでになく足繁く徳島に帰った。森・前田・笠井もその後もたびたび城山貝塚を訪れている。

1953(昭和28)年 5 月30日，笠井新也は講師を勤める徳島大学で城山貝塚の講義と現地を学生に案内した後，前田正一を訪ねた。その後日談は冒頭でも取り上げたが，特に関連の深い 2 つを取り上げておきたい。

「〇第一貝塚の追掘

鳥居先生が帰られて後，井上達三氏は単独で人夫を指揮して第一貝塚を掘った。これは自分（前田氏）にも，森氏にも相談なく，自由行動で掘ったのである。あの巨岩の下をトンネル式に掘り進んだ。その遺物中珍しいものとしては 土器の表面に金をちりばめてあるもの，ハマグリの貝殻に粗朴な人面の目口を彫刻したもの数個を得たということであった。果して真実であらうか。

〇朱ぬり土器【1 －12 ①】

第二貝塚から出た土器破片中に，朱線を施したものがあった。（スケッチ図）」（笠井新也　2010：39－40）

ここまでの調査経過を一覧にしたものが，表 8 である。城山貝塚の発見経緯は奇遇な出会いも含めて紹介されるが，調査の実態は詳らかではなかった。こうしてみると，第 2 号貝塚・第 3 号洞窟貝塚が重点的に調査されたことがよくわかる。第 3 号洞窟貝塚から着手したのは，鳥居がこの間たびたび

述べているように，当時洞窟遺跡は，1922（大正11）年 3 月に国史跡に指定された富山県氷見市の大境洞窟住居跡が知られるに過ぎなかったことも大きな要因である。また第 2 号貝塚は，人骨が出土したことが大きな要因であり，縄文土器の出土も大きかったと考えられる。中間にある 4 号遺跡には手が回っても，第 1 号貝塚までは鳥居の滞在期間内に本格的に手を付けられなかったというのが実情ではないかと考えられる。

表 8　1922（大正11）年の城山貝塚関連調査経過

現存する遺物註記や拓本記録等並びに写真に日付が記されているものは記号で記載した。
凡例●土器類，○石器類，◎その他，□写真

日　付	鳥　居	第 1 号貝塚	第 2 号貝塚	第 3 号洞窟貝塚	第 4 号遺跡	第 5 号遺跡その他
3月27日	帰郷・市内眉山東麓～蔵本巡検			前田採集物を寄贈○○○○○○●蔵本城ノ内●●		
3月28日						
3月29日	三好郡巡検，脇町笠井宅					
3月30日	脇町～小松島巡検					
3月31日	在宅					
4月1日	堀江村巡検					
4月2日	講演会／歓迎会					
4月3日	城山巡検／発見	鳥居一行が発見				
4月4日	発見・帰京	5～6 間東方を発掘も何も出ず	森敬介が発見●●◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎	前田正一が発見●●		
4月5日		井上・森・前田の下調査，掲示板の設置。●●◎◎◎◎◎			井上達三が発見	第 5 号遺跡を笠井新也が発見 旧龍王宮大楠附近で貝塚土器発見●●◎◎◎◎
4月6日		これまで発見の遺物を東京帝国大学人類学教室へ送付				
4月7日					前田，三野村勢力で凸帯ある土器発見	
4月8日						
4月9日						
4月10日						
4月11日						
4月12日						
4月13日						
4月14日						
4月15日						
4月16日						
4月17日					森・前田，瑞巌寺境内で貝塚発掘	
4月18日						
4月19日	来徳					
4月20日	調査指導・3 号			全員で発掘開始		
4月21日	調査指導・3 号			貝層に達し弥生式，アイヌ風土器が出土		
4月22日	調査指導・3 号			弥生式･アイヌ風土器出土，完形弥生土器，椿の葉出土●◎◎□□		
4月23日	調査指導・3 号			雨天，発掘続行，石器・貝出土		
4月24日	調査指導・3 号 喜田貞吉来訪			雨天，発掘続行，サヌカイト・打製石斧・錘石		
4月25日	調査指導・3 号			発掘続行，サヌカイト片・動物骨・魚骨，□		
4月26日	調査指導・3 号			洞窟内ほぼ完掘状態		
4月27日	調査指導・3 号／2 号／4 号	精査開始？	精査開始	道路面に延長し発掘続行，木樋確認，◎◎□□□□□□	精査開始	
4月28日	調査指導・3 号／2 号／4 号 小金井良精に電報		本発掘開始，人骨・石器出土□□□	道路面の巨石遺跡，土師質皿出土●●●●●□□□□	発掘作業	

日　付	鳥　居	第1号貝塚	第2号貝塚	第3号洞窟貝塚	第4号遺跡	第5号遺跡その他
4月29日	調査指導・3号／4号		少年の人骨，現状保存	巨石遺跡掘り下げ，ドルメン？□□□□	発掘作業	
4月30日	調査指導・3号 小金井来徳		現状保存，小金井到着・予察	巨石遺跡はドルメン断定	発掘作業，貝殻・弥生土器，□□	
5月1日	調査指導・2号 小金井調査		小金井人骨調査 ●●●◎◎□□□□□□	巨石遺跡掘り下げ，貝塚判明	非貝塚，壺破片多数●□□	
5月2日	調査指導・2号／3号 小金井調査，帰京		小金井人骨調査 □□□□□	サヌカイト出土，□□		
5月3日	調査指導・2号／3号／4号		主力集中，磨消縄文土器・鉄器出土 ●●○◎□□□□□□□	巨石遺跡との中間，貝層と縄文土器片	貝殻多数・弥生式壺	
5月4日	弘誓寺貝塚巡検 持ち帰り遺物整理		腰部以下の人骨・サヌカイト打製石包丁出土，◎□			午前，助任弘誓寺貝塚調査●○● 旧龍王宮大楠□□
5月5日	調査後，夜帰京		縄文土器多数・石斧，□		主力集中	
5月6日			縄文土器・石器出土 □□□			旧龍王宮大楠下発掘，瓦・土器●●
5月7日			縄文土器・石器出土			
5月8日	大学へ徳島出張の報告		クスドイゲの葉出土 ◎		祝部土器破片出土 □□	
5月9日	城山貝塚全国紙報道	●			●●□	
5月10日	城山貝塚全国紙報道（国民等）		燧石製打製石庖丁			
5月11日			紡錘形中空の土錘・サヌカイトナイフ出土●○	古代土器・獣骨	●	
5月12日			縄文土器　●	祝部土器・石庖丁	●	
5月13日			骨製釣針　□□		魚骨	
5月14日			●●●●●□			
5月15日						
5月16日			●●		□□□□□□	
5月17日			□	□	□□□□	
5月18日				□	□	
5月19日					□	
5月20日		発掘開始　□□		掘削土を篩にかけ土器多数		
5月21日		土器片多数・貝類・獣骨・鉄片　◎	◎			
5月22日		古墳時代土器・骨製釣針出土●●		◎		
5月23日		砂金のアイヌ派土器　●●				
5月24日		●●●●●●●●●				
5月25日		●●●●				
5月26日		●●	●●●●●●●●◎◎			
5月27日	人類学会で城山貝塚講演	掘削打ち切り	●◎			
5月28日						
5月29日			●●○			
5月30日						

3　遺された出土遺物及びその記録の様相

以上のように，表1～7で遺物・拓本スケッチの註記等一覧を作成し，調査経過を精査した。ここまでの経過の観察でもわかるように，註記の日付が出土日を表すものばかりではないが，調査の中で注目されたポイントとなる遺物の多くは東京大学総合研究博物館に遺されていることが判明した。

(1) 東京大学総合研究博物館人類先史部門所蔵の資料

遺物そのものが残る東大資料について，個々に記録を記載した表2をもとに，遺物種類と出土地を一覧にしたものが表9である。

表9　東京大学総合研究博物館所蔵城山貝塚関係遺物分類

遺物種類	第1号貝塚	第2号貝塚	第3号洞窟貝塚	第4号遺跡	不明	小計	その他
縄文土器		39	24		6	69	前田採集石器等 7
弥生土器		1	2		1	4	
土師質土器			18		2	20	大安寺前 2
須恵質土器						0	
陶磁器						0	蔵本城ノ内 4
土製品		1				1	
石器類		22	2		1	25	大楠下龍王宮跡 6
鉄類		1	1			2	
木質類			4		9	13	弘誓寺貝塚 2
土類					1	1	
人骨		1				1	城山山頂 2
獣骨類		15	22		1	38	
魚骨		2				2	不明 4
貝		14	1		10	25	
貝垂飾類		2				2	
小計	0	98	74	0	31		27
						総計	230

一見してわかるように，第2号貝塚と第3号洞窟貝塚（前庭部を含む）のものが大半を占め，第1号貝塚と第4号遺跡のものは見あたらない。鳥居自身が現地で調査した2つの貝塚遺跡と，3月27日帰徳の際，前田から寄贈された県内外の採集石器7点，県内踏査の徳島市佐古大安寺前2点，蔵本城ノ内で採集した中世の遺物4点，4月6日井上が送った城山西南部の大楠下龍王宮跡地の出土品6点，5月4日の城山北方の沖積地，蜂須賀家墓所に隣接する弘誓寺貝塚の採集物2点，11月に皇太子（昭和天皇）台覧があった際採集した埴輪2点[(11)]といずれの遺物も鳥居の行動行程と符合するものである。

また，第1号貝塚は発見時のみの知見で，井上が発掘した5月後半のことは存在しないことになっている様にも見える。井上の拓本を見る限り磨消縄文を施した土器が含まれており，写真図版は5月20日の日付のある着手前写真2枚だけである。日付のある最後の2枚がこの貝塚であるが，その写真裏には22日の発掘状況が墨書で記載されている。地元新聞には第1号貝塚の「砂金入り土器」検出の際，鳥居に電報を発することなど報じられているが，遺物そのものも存在せず，前田の述懐にあるよ

うに井上が鳥居に相談もせず発掘を始めたのであれば，発掘情報そのものを送ることを憚ったのではないだろうか。鳥居もあずかり知らず，ということにしたのではないかとも考えられる。

中世以降とみられる第4遺跡については，鳥居自身の関心が低く遺物も重視していなかったとみて良いのではないか。

遺物は3度に分けて大学に送られたものとみられる。最初の送付は3箇所の貝塚発見の後周辺部を踏査し，かき集めた一群のものを4月6日に送った旨の新聞記事がある。これは，【縄文土器1－8・1－17④⑤，獣骨等1－25①～⑤・貝類1－16①～⑤・1－17①～③】が記録に残るものであるが，1－16と5－39に付属する井上の墨書略図はまさにこの一群に付けられたものである。しかし縄文土器422・428・429・430・434・435，貝類451・452は前田の記録には4月4日発見と残るものの，大学博物館には存在しない。

大学博物館に遺された包装物やラベル，遺物註記には特色がある。無地封筒に墨書で註記と略図を書いたものは徳島で整理されたものと考えられ，人類学会宛封筒再利用または「理科大学人類学教室」のラベルを使用したものは大学で整理されたものであろう。しかしラベルを付加していない一群がある。遺物註記にも特色がみられる。3号洞窟貝塚の遺物には丁寧な註記が施されているが，多くの遺物に「鳥居採」の文字がみられ，これは大学で記入したものであると考えてよいであろう。一方，徳島の森敬介特有の註記，特に日付の書き方，即ち「大」の字の下に年数，左に月数，右に日数を記すもの[12]が目立つ一群がある。

こうした特色からみると，2度目は5月5日に鳥居が帰京する際に持ち帰った可能性が高い一群であるが，4月19日以降5月5日までの鳥居が現地で調査指導を行った期間の遺物は，無地封筒と大学のラベルが両方付いており，大学で遺物註記したとみられるものが多くある。例えば1－12にまとめられた縄文土器，1－13・1－14・1－21・1－24・1－25・1－28・1－29・1－30・1－32・2－3・4－1は鳥居が持ち帰った可能性が高い一群である。5月5日以降の日付が書かれた一群1－1・1－2・1－3・1－4・1－5・1－6・1－7・1－9・1－10・1－11・1－15・1－18・1－19・1－20・1－22・1－23・1－26・1－27・1－31にはラベルは付けられておらず，この一群が調査終了後に大学に送られたものと考えられる。遺物註記も森の特色ある註記方法である。

ほかに再利用封筒の中に「昭和」の年号が印刷されたものもあり，昭和前期に再整理が行われた可能性が考えられる。大学で註記されたものには「鳥居四国行」の文字も散見される。

一方，この註記の中に，遺物には第3号洞窟貝塚を示す註記がありながら，後述する地元で遺した拓本の註記が第2貝塚を示しているものが3点ある。双方に誤りの可能性があるが，地元で作業に実際関わった者の認識を優先させて扱うこととした。

第2号貝塚から出土した3体の人骨については，発見時の報道には頭蓋骨を伴う1体は「少年の人骨」「年若き婦人」，下肢のみ出現しているものは「若い男」と混乱している。小金井良精が5月1日と2日に屈葬の人骨と頭蓋骨を伴わない人骨の2体の調査を行うが，この時は頭蓋骨を含む屈葬人骨は「大人の骨格」と報道され，「下肢のみ見えて居たもう一体は肋骨などの小片が数個出たばかり」であったという[13]。その後大学に送付されている【5－43】。鈴木尚が1970年『鳥居龍蔵博士の思い出』のなかで頭蓋骨を含む人骨を報告しているが「幼年人骨」である。資料は「東京大学医学部解剖学教室に収蔵されていたもの」で，「新設された東京大学総合研究資料館人類学部門（現東京大学総合研究博物館人類先史部門）に移管された際，確認された」とある。また小金井が帰京後，5月4日に発見された人骨は，下肢1本【1－22】[14]だけが今回調査した資料群のなかで確認された。この人骨発見に際して，貝輪の破片が発見されている【4－1①②】。『徳島市史』の挿図に完形の貝輪が掲載されているが，調査経過精査の過程でも完形の貝輪が出土した記録は見あたらず，これは1922年の発掘調査時に出土したものではなく，後日何らかの契機で採集された可能性が考えられる。

(2) 徳島に残る資料群

また，地元徳島では森敬介・前田正一・井上達三の 3 人が出土資料の記録を残している。拓本が中心だが，スケッチやメモも多い。それぞれに特色があるので個別にみてみたい。

① 森敬介の採録した出土遺物

森の遺した拓本集は冒頭でも述べた 3 つの綴り「徳島公園城山貝塚出土品拓本」(表 4)，「徳島公園城山遺跡遺物集」(表 5)，「徳島公演城山第二貝塚遺物集」(表 6) にまとめられている。同一人物であるので，森の記録ということで，ひとつにまとめたのが表10である。

拓本集という性格上，土器以外の遺物について採録することは困難であるが，縄文土器を中心に各貝塚の土器を丁寧に採録している。表にあるように記録総数は107点，重複記録30点を除くと，遺された遺物以外の情報77点を知ることができる。

森は第 2 号貝塚を発見し，その後担当しているため，当然のことながら，第 2 号貝塚の資料が最も多い。重複記録も25点あるが，森はその後も第 2 号貝塚を訪れ，8 月14日と翌年の 1 月22日にも土器を採集し，採拓している。したがって，3 冊にまとめたのは採集日以降のことである。「第二貝塚集」には註記のないものがあり，第 2 号貝塚出土の確実性を疑われるものもなくはないが，蓋然性から第 2 号貝塚のものとして取り扱うこととする。

また，第 1 号貝塚の出土土器拓本も16点と井上より多く記録を残しており，貴重な記録である。

なお，第 3 号洞窟貝塚の平面図・立面図も作成している。

表10　森敬介採録城山貝塚関係遺物分類（重複記録は除く）

遺物種類	第 1 号貝塚	第 2 号貝塚	第 3 号洞窟貝塚	第 4 号遺跡	不明	小計	その他
縄文土器	14	37			7	58	第 2 号貝塚1922年 8 月14日採集 3
弥生土器	1					1	
土師質土器				2		2	
須恵質土器			1	3		4	第 2 号貝塚1923年 1 月22日採集 4
陶磁器				2		2	
土製品	1					1	
石器類		1			1	2	
鉄類						0	重複記録 4
木質類						0	
土類						0	
人骨						0	
獣骨類						0	
魚骨						0	
貝						0	
貝垂飾類		1				1	
小計	16	39	1	7	8		7
		重複記録 25	重複記録 1			総計	78
						総記録数	108

② 前田正一の採録した出土遺物等

県内をはじめ各所で考古遺物のみならず様々な歴史民俗資料を渉猟した前田の資料の中で「県立図書館分類228」,「県立図書館分類225「城山貝塚資料」」,「県立図書館分類222「城山貝塚説明書」」,「県立図書館分類243「徳島城山貝塚其他出土品鑑　第一集」綴」[15]の 4 つに散在するスケッチ・拓本類を集めた。拓本よりスケッチの割合が多いが，獣骨などについては精細な筆致で記録を残しており，またそれぞれに関するメモも貴重である。表 7 をまとめたものが，表11である。

森に比べてスケッチが多いという特色もあるが，土器以上に石器に関する記録が多い。各貝塚満遍なく記録している。重複記録も多いが，それぞれにあるメモで，東大資料や森の資料を補完する情報が多くある。一方で輪郭線だけのものも多く，遺物情報が限定されるものも含まれている。

他と重複しない遺物情報は65点あり，貴重な記録である。

なお，4 月 4 日の第 2 号貝塚発見記録には「人骨の破片」の記載があり，前田は 434・435 を人の腰骨としたスケッチがあるが，詳細な検討は今後の課題である。

また，他に出土状況図や人骨出土状況スケッチなども残されており再現する上では重要な資料群であることは間違いない。

表11　前田正一採録城山貝塚関係遺物分類（重複記録は除く）

遺物種類	第 1 号貝塚	第 2 号貝塚	第 3 号洞窟貝塚	第 4 号遺跡	不明	小計	その他
縄文土器		10	6	1		17	蔵本城ノ内採集 重複記録 3
弥生土器				3	1	4	
土師質土器				1		1	
須恵質土器						0	第 1 号貝塚1932年 8 月20日採集 1
陶磁器						0	
土製品						0	
石器類	1	6	3		9	19	大安寺前 重複記録 2
鉄類						0	
木質類						0	
土類						0	
人骨						0	
獣骨類		9				9	
魚骨						0	
貝	8	3	3		1	15	
貝垂飾類						0	
小計	9	28	12	5	11		1

重複記録 1　　重複記録 20　　総計　66

総記録数　90

③ 井上達三の採録した出土遺物等

本研究報告第 1 号でも紹介された資料（長谷川　2013）で，それを遺物個体別に一覧としたものが表 8 であり，それをまとめたものが表 12 である。

井上が遺した重複しない記録は22点であり，ほとんど独自な視点と行動によって獲得した記録である。鳥居が帰京してしばらくしてから，森や前田にも相談しないで発掘調査を始めた第 1 号貝塚の優品が記録されている。また，桃核の笛とされるもの，瓦や陶磁器など他の調査者が目を付けないものの記録を採っている。

表12　井上達三採録城山貝塚関係遺物分類（重複記録は除く）

遺物種類	第 1 号貝塚	第 2 号貝塚	第 3 号洞窟貝塚	第 4 号遺跡	不明	小計	その他
縄 文 土 器	7					7	豊玉比賣神社跡（大楠下）採集 2
弥 生 土 器						0	
土師質土器						0	
須恵質土器				1		1	弘誓寺貝塚 2
陶　磁　器				2			
土　製　品			1	1		2	
石　器　類	2					2	
鉄　　類						0	
木　質　類	1		1			2	
土　　類						0	
人　　骨						0	
獣　骨　類						0	
魚　　骨						0	
貝						0	
貝 垂 飾 類	2					2	
小　計	12	0	2	4	0		4

重複記録 1　　総計　22

総記録数　23

4　小　　結

以上のように，城山貝塚の発掘調査で出土したとみられる遺物総数は遺物そのものが残るものは203点，拓本やスケッチで，現存する遺物と重複しないものは154点ある。つまり，前田が後年語った「遺物の面白いもの」は203点であるということであり，戦災で失われた遺物の一部の記録が154点である。(16)

それぞれの遺構ごとに把握した現状をまとめると，第 1 号貝塚36点，第 2 号貝塚165点，第 3 号洞窟貝塚86点，第 4 号遺跡16点，出土地不明49点である。接合等で多少の数量変化はあると考えられる。

今後，出土遺物203点と拓本スケッチとして遺された154点をあわせて遺跡ごとに実測図ないし拓本等を整理し，城山貝塚の実体に迫っていきたいと考えている。

本稿をまとめるにあたり，東京大学総合研究博物館人類先史部門の諏訪元教授，稲葉佳代子氏をはじめ，つぎの方々にご協力，ご教示をいただいた。記して謝意を表したい。なお，文中は敬称を略させていただいた，ご寛恕を願いたい。

徳島県立図書館　水上英俊　田村加代

天羽利夫　鳥居喬　高島芳弘　長谷川賢二　松永友和　中尾賢一　下田順一

注

(1) 城山貝塚調査を紹介した文献には，東京人類学会(1922 a, 1922b), 阿波名勝会(1922 a, 1922 b, 1922c), 笠井新也（1922, 2010), 笠井藍水（1922), 喜田（1922), 鳥居龍蔵（1923), 直良（1925), 徳島県史蹟名勝天然記念物調査会（1929), 福井(1942), 前田（1952), 多田（1955), 飯田（1960), 鈴木(1970), 徳島市史編さん室(1973), 新(1983), 天羽・岡山（1985), 岡山（1987), 天羽（1994), 原（2009), 湯浅（2010, 2011), 鳥居喬（2011), 石尾（2013), 長谷川（2013）がある。

(2) 表1は写真・拓本・スケッチ等公開済みのもの。仮番号は001～027とした。表2の東京大学総合研究博物館人類先史部門の資料は当該館の収蔵状態に基づいた分類に従い，1～5の大分類に中分類・小分類を加えたものとした。また森敬介の資料は綴りごとに表3は100番台，表4は200番台，表5は300番台とし，前田正一資料は数種類の綴りや袋詰めになっているものをまとめて表6とし，400番台をつけた。井上達三資料は一綴りを表7として500番台を付した。表の中で貝の種類は註記に従い，註記のないものは中尾賢一氏にご教示いただいた。

(3) 鳥居関係の新聞記事の渉猟は鳥居喬氏が精力的に行っている（鳥居喬　2011)。他に前田正一資料のなかで関係記事を集めたものがあり，マイクロフィルムで読めない部分を参照した。

(4) このことについては石尾和仁の考察がある（石尾　2013：7)。

(5)　徳島県立鳥居記念博物館（旧館）の開館（1965年3月）にあたり，東京大学理学部人類学教室に1964年7月28日付で徳島県教育委員会が借用依頼したアジア各地の民族資料群のなかに「徳島市城山貝塚資料（木箱三ヶ)」があり，以降は借用期間を更新しながら現在に至っている。

(6)『徳島市史』等で城山貝塚を叙述した天羽利夫氏への取材でも，同様の話が伝わっているという。

(7) この間の鳥居一行の遺跡見学については，前田正一が「このあたりの有史以前をたづねゆく」と題して『徳毎』3月31日付から4月24日まで12回にわたって連載したほか, 鳥居の講演録,『阿波名勝』第2号の記事（阿波名勝会　1922c)，森敬介のメモ（新　1983）にも記されている。

(8)「博士が大毎社長本山彦一氏と親友である関係上大毎通信部が主催となって講演会を開催する」(『徳毎』3月28日付）とある。

(9) この時の鳥居の講演内容は地元2紙が詳細な記録を掲載した。『日日』が先んじて4日･5日に「有史以前の阿波（上)・(中）二日新町校に於ける　鳥居博士講演梗概」を掲載したが，鳥居が城山貝塚発見後に中止を求め，(下）の掲載を取りやめている。一方の『徳毎』は「阿波に於ける有史以前　文学博士　鳥居龍蔵氏講演要旨」と題し4回に分けて7日・9日・10日・12日に掲載した。

(10) 図1（ニ）の土器がそれにあたる。ただし弥生時代前期の壺形土器体部凸帯と見られるため，一覧からは除外した。

(11) 徳島市城山に古墳が存在したことは伝承も含め，これまで知られていないが,『徳毎』1922年11月27日付の鳥居の談話に「山頂で先日発見した埴輪の同筒並に家型埴輪の同所に存在して居たと考えられる」とある。

(12) 一覧ではそのまま示せないので「大11　5　27」のように記している。また, 第2号貝塚（「人骨貝塚」）を示す「人」を丸で囲む記号も多く用いられているがこれも「〇人」のように記した。

(13) 調査経緯の中に採録した5月3日付の『徳毎』の記事が詳しく当時の発掘状況を伝えている。県内調査や城山貝塚調査にも参加した記者斎藤聖蛙の筆によるものではないかと考えられる。

(14) 諏訪元氏のご教示によると，当該骨は，左上腕骨である。

(15) 笠井が見た前田氏図録は分類243の綴りと思われる。次のように記録している「前田氏は城山貝塚の見取図，遺物の見取図をまとめて一冊としている。それには貴重な資料が多い。その中に第二貝塚から出たというサヌカイト石庖丁の拓本がある。そのクシ形であるのは珍しい。尚，氏の図録中には上八万星河内古墳出土の鏡三面出雲石製大型鍬形石，車輪石等の拓本，池田藤川氏採集の土器石器の拓本，見取図等もある。」(笠井新也　2010：40)

(16) 他に本山彦一のコレクションを所蔵する関西大学博物館本山考古室の目録に「石鏃，貝殻一括　阿波国徳島市城山貝塚」という項目があ

るが，実体は不明であるとともに，本山コレクションに加えられる可能性があったのかどうかも現在はわからない。また，徳島県立博物館の常設展示に「城山貝塚　出土品」として，貝殻が並んでいるが，これは後年採集した方の寄贈品で，1922年当時の出土品ではないことを付記しておきたい。

図の出典

図 1・2・10　徳島県立図書館蔵マイクロフィルム
図 3・6 ～ 9　徳島県立図書館蔵　筆者撮影
図 4　鳥居喬氏提供
図 5　左の 2 枚は2016年11月17日資料実見の際に筆者撮影。右の展示資料も筆者撮影。
図10～15　キャプションの文献それぞれから複写

参考文献

天羽利夫　1994 「城山貝塚」「徳島城」編集委員会編『徳島城』徳島市立図書館，48 ～55 頁
天羽利夫・岡山真知子　1985 「鳥居龍蔵と城山貝塚」『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館，52～55頁
阿波名勝会　1922a 「鳥居博士が發見して學界を驚かした城山洞窟の貝塚」『阿波名勝』第 2 号, 阿波名勝会，46～56頁
阿波名勝会　1922b 「遺蹟，遺物のあらまし」『阿波名勝』第 2 号，阿波名勝会，75～84頁
阿波名勝会　1922c 「鳥居博士の踏査」『阿波名勝』第 2 号，阿波名勝会，85～86頁
飯田義資　1960 「城山の貝塚」『名東郡史』第 2 章名東郡の歴史一先史時代，16～17頁
石尾和仁　2013 「特集「鳥居龍蔵と城山貝塚調査」にあたって」「資料紹介　城山貝塚調査写真」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』第 1 号
岡山真知子　1987 「阿波史を見直す 6　鳥居龍蔵と城山貝塚」『徳島新聞』昭和62年 6 月16日文化欄
笠井新也　1922 「阿波国貝塚概説」『阿波名勝』第 2 号，阿波名勝会，56～69頁
笠井新也　2010 「城山貝塚発掘記」『青藍』第 7 号，考古フォーラム蔵本，30～40頁
笠井藍水　1922 「城山洞窟の成因について」『阿波名勝』第 2 号，阿波名勝会，70～74頁
喜田貞吉　1922 「学窓日誌　九月八日　徳島旧城山岩窟内の遺跡」『民族と歴史』第 8 巻第 4 号，86～89頁
新孝一　1983 「徳島県立図書館所蔵の森敬介氏資料 ― 徳島市城山貝塚に関する資料」『徳島考古』創刊号，徳島考古学研究グループ，16～22頁
鈴木尚　1970 「徳島市内城山第二洞窟発掘の幼年人骨について」『鳥居龍蔵博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館，14～18頁
多田伝三　1955 「城山の貝塚」『徳島県教育月報』No63，表紙裏
東京人類学会　1922a 「鳥居博士の徳島縣洞窟遺蹟調査」『人類学雑誌』第 37 巻第 5 号，東京人類学会，158～159頁
東京人類学会　1922b 「東宮殿下の徳島縣城山石器時代遺蹟御見学」『人類学雑誌』第37巻第12号，東京人類学会，454～455頁
徳島県史蹟名勝天然記念物調査会　1929 「徳島城山に於ける石器時代の遺蹟」「城山第二貝塚」「徳島公園岩窟遺蹟（城山第三貝塚）」『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯，徳島県，1 ～ 3 頁
徳島市史編さん室　1973 「城山貝塚」『徳島市史　第一巻　総説編』徳島市，7 ～11頁
鳥居喬　2011 「新聞記事から見る鳥居龍蔵と仲間たちの足跡」『鳥居龍蔵研究』創刊号, 鳥居龍蔵を語る会，81～102頁
鳥居龍蔵　1918 『有史以前の日本』磯部甲陽堂
鳥居龍蔵　1923 「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育畫報』16巻 5 号，同文館，192～198頁
直良信夫　1925 「徳島の石器時代遺物について」『考古学雑誌』第15巻11号，705～735頁
長谷川賢二　2013 「井上達三『国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地』解題」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』第 1 号
原多賀子　2009 「徳島と鳥居龍蔵」一山典還暦記念論集刊行会編　『考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会，617～622頁
福井孝行　1942 「阿波の貝塚」『考古（立命館）』1 号，106～118頁
前田正一　1952 「徳島城山の貝塚」（1）～（4）『徳島新聞』昭和27年 4 月10日～13日文化欄
湯浅利彦　2010 「「城山貝塚発掘記」解題」『青藍』第 7 号，考古フォーラム蔵本，41～46頁
湯浅利彦　2011 「鳥居龍蔵の城山貝塚調査」『徳島新聞』平成 23年 9 月17日文化欄（滝本昇まとめ）

表２　東京大学総合研究博物館所蔵城山貝塚関係遺物一覧

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-5	①	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし	無地封筒	略図（中央の枠内に「頭ノ二寸位下」） 人骨貝塚　採第20号 土器参個　骨と同平面 人骨ノ頭ト左腕トノ中間（全朱墨）	・前田411拓本「赤　頭ト左腕トノ中間骨ト同一平面(朱墨)」
	②	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			・前田410拓本「黒　枕下二寸位(朱墨)」
	③	弥生土器？	不明	胴部片	1点	なし			・前田409拓本「第二号遺跡　アイヌ派土器(墨書)　赤ノアイヌ式(朱墨)」以上3点同紙
1-6		縄文土器	深鉢	胴部片	1点	○人　大11　5　26　N. 13	無地封筒 半裁	天井石ヨリ 1尺4寸	
1-7		縄文土器	浅鉢か	肩部か 沈線2条	1点	人　大11　5　26　N. 17	無地封筒 半裁	天井石ヨリ3寸	・森322拓本「第二貝塚集」22頁⑳－1か？「大11　5　26　第二」
1-8		縄文土器	深鉢 凸帯文	口縁部片	1点	なし	東京人類学会宛大阪府福田郵便局通信事務封筒	第二号（貝塚 土器　（墨書）	・森301拓本「第二貝塚集」1頁①「第二貝塚」 ・前田403スケッチ「土器の表面に鉢巻の如く箍をかけそれに切欠ぎを施したるもの　これも阿波のアイヌ派土器なり(ペン書)」 ・前田486スケッチ「箍（たが）　アイヌ派土器　池田町のも此土器出土せり（墨書）第二号遺跡森氏四月四日午後三時半発見（墨書）」 ・『徳毎』大正11年4月24日前田スケッチ掲載003 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載007 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載016
							小紙片	第二号　土器（ペン書）	
							理科大学人類学教室ラベル	~~第三号巌窟　石器ノ原料及石庖丁~~（墨書取消朱書）	
							紙片	（注意　上部ノ突起ハ破断面ナリ）☆ 當初発見の位置よりビテイ骨貝等ト共ニ出でたるもの（ペン書）	
1-9		縄文土器	深鉢	胴部片	1点	大11　5　29 ○人	無地封筒 半裁	大11　5　29　○人 砂金入　（墨書）	
1-10		縄文土器	深鉢 凸帯文	口縁部片	1点	○人　N. 14 大11　5　26	無地封筒 半裁	天井石ヨリ 1尺8寸　（墨書）	・森324拓本「第二貝塚集」22頁21「大11　5　26　第二」
1-11		縄文土器	深鉢	口縁部片	1点	なし	無地封筒	大11　5　29（ペン書） ■■エ　■1尺8寸　まで7寸（青鉛筆）	・第2号貝塚か
1-12	①	縄文土器	鉢	口縁部片	1点	なし	人類学会宛東京プロセス社請求書封筒（昭和年号付）	第二号貝塚　アイヌ派土器 溝ニ朱線アルニ注意（墨書）	・森102・112「拓本集」2頁「人骨貝塚朱線入土器（土ニ貝殻粉末ヲ交ユ）」、12頁「人骨貝塚朱線入土器（土ニ貝殻粉末ヲ交ユ）」 ・現存土器と同一個体を拓本したものと思われるが、形状は異なる。
	②	縄文土器	浅鉢か	口縁部片	1点	○人			・森353拓本「第二貝塚集」48頁下50「第二」
	③	縄文土器	深鉢	肩部か 沈線4条	1点	なし			・森拓本「第二貝塚集」37頁38(341)に全体形状似るが、別物か
	④	縄文土器	深鉢 凸帯文	口縁部片	1点	人骨			・森351拓本「第二貝塚集」47頁48注記なし
	⑤	縄文土器	鉢	口縁部片 沈線3条， 縄文帯	1点	なし			・森338拓本「第二貝塚集」34頁35「大11　5　12　第二貝塚」
	⑥	縄文土器	浅鉢	口縁部片 外面縄文	1点	○人			・森352拓本「第二貝塚集」48頁上49「第二」
	⑦	縄文土器	浅鉢	口縁部片 内外縄文 沈線	1点	なし			・森329拓本「第二貝塚集」26頁26「大11　5　10　午前十時四十分　第二貝塚」
	⑧	縄文土器	浅鉢	肩部片 磨消縄文	1点	断面に「人骨貝塚」			・森304・307拓本「第二貝塚集」4頁4，7頁7とも「第二貝塚」 ・前田446スケッチ「Ⅱ　渦巻的縄紋（墨書）」 ・『徳毎』大正11年5月5日前田スケッチ掲載004 ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載013 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月12日スケッチ掲載018
	⑨	縄文土器	深鉢	口縁部片	1点	なし			・第2号貝塚か

表１　図面等が公開された城山貝塚遺跡出土遺物一覧

仮番号	遺物内容				掲載誌等		対応資料	参照
001	縄文土器	深鉢	口縁部，波状突起	1点	『徳毎』大正11年4月24日付，1面	(イ)	5-32，401	図１
002	縄文土器	深鉢	口縁部，端部刻目	1点		(ロ)	該当なし	
003	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点		(ハ)	1-8，301，403，486	
004	縄文土器	浅鉢	口縁部，磨消縄文	1点	『徳毎』大正11年5月5日付，1面	第一図	1-12⑧，304，307，446，	図10
005	縄文土器	深鉢	胴部，沈線文	1点		第二図	1-30⑪，306，447	
006	弥生土器	壺	完形	1点	『日日』大正11年4月26日付，3面写真掲載 『徳毎』大正11年4月27日付，写真掲載		該当なし	図11
					『阿波名勝』第2号大正11年7月，口絵写真	中1		
007	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点		左上2	1-8，301，403，486	
008	縄文土器	深鉢	口縁部，波状突起	1点		左下3	5-32，401	
009	石器	削器		1点		右上4	1-30⑧	
010	石器	削器	石庖丁か	1点		右下5	該当なし	
011	縄文土器	深鉢	胴部，縄文施文	1点	『阿波名勝』第2号大正11年7月，80頁挿図	左上	1-12⑬，346	図12
012	縄文土器	浅鉢	胴部，条痕文	1点		左下	該当なし	
013	縄文土器	深鉢	口縁部，磨消縄文	1点		右上	1-12⑧，304，307，446，	
014	縄文土器	深鉢	胴部，沈線文	1点		右中	1-30⑪，306，447	
015	縄文土器	深鉢	胴部，条痕文	1点		右下	該当なし	
016	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点	前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日，スケッチ	C号	1-8，301，403，486	図13
017	縄文土器	深鉢	口縁部，波状突起	1点		D号	5-32，401	
018	縄文土器	浅鉢	口縁部，磨消縄文	1点	前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月12日，スケッチ	E号	1-12⑧，304，307，446，	
019	人骨	幼年	頭骨	2点	鈴木尚1970「徳島市内城山第二洞窟発掘の幼年人骨について」『鳥居龍蔵博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館		該当なし	図14
020	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点	『徳島市史』第一巻1973，11頁挿図	左上	5-15，314	図15
021	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点		左中	5-12	
022	縄文土器	深鉢	口縁部，凸帯文	1点		左下	5-14，203，417，456	
023	縄文土器	深鉢	口縁部，頸部沈線	1点		中上	5-31	
024	縄文土器	深鉢	口縁部，爪形文	1点		中下	5-3，318	
025	縄文土器	深鉢	肩部，巻貝押捺文	1点		右上	5-4	
026	縄文土器	深鉢	口縁部，条痕文	1点		右中	5-8	
027	貝輪		完形	1点	『徳島市史』第一巻1973，11頁挿図，浪花勇次郎氏提供	右下	該当なし	

表２　東京大学総合研究博物館所蔵城山貝塚関係遺物一覧

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-1		縄文土器	深鉢	胴部片	1点	○人　大11 5　27　No31 か	無地封筒 半裁	No21　天井より4尺5寸	
1-2	①	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	○人　大11 5　26　No18	無地封筒	第二号(朱墨) No18　天2尺5寸 No19　4尺5寸	
	②	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	○人　大11 5　26　No19			
1-3		土師質土器	高台付椀	体部底部	4点 同個体	第三号 ドルメン 東北隅	無地封筒	出土位置略図(墨書) ←1．7→　←3．1→ 深三尺七寸 土器(以上朱墨)	
							六痴社印刷所封筒 昭和年月日	なし	
							メモ札	第五号 ドルメン 東北隅部	
1-4	①	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし	無地封筒	X10．　Y0．0　－4．2 貝層の上(鉛筆書) 第二号遺跡(朱墨)	
	②	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			
	③	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-12	⑩	縄文土器	深鉢 凸帯文	口縁部片	1点	なし	理科大学人類学教室ラベル	第二號貝塚 アイヌ派土器 溝ニ朱線アルニ注意 (墨書)	・第2号貝塚か
	⑪	縄文土器	深鉢	口縁部片	1点	人骨貝塚　A			・森354拓本・スケッチ「第二貝塚集」50頁51「第二貝塚」
	⑫	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			・第2号貝塚か
	⑬	縄文土器	深鉢 縄文	胴部片	1点	断面に「人骨貝塚」			・森346拓本「第二貝塚集」42頁43注記なし ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載011
	⑭	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			
	⑮	縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし			
1-13		縄文土器	深鉢	口縁部片	1点	なし	東京人類学会宛熊本郵便局通信事務封筒	第二号貝塚の無記　(墨書)	・前田485スケッチ「アイヌ派土器なり(墨書)　赤焼　此上縁ニ所々ノ　土器の上縁なり破断口にあらず　表面貝発見二尺二寸所アリ　東四十五度傾斜四寸(ペン書)」
1-14		縄文土器	深鉢	胴部片	1点	なし	東京人類学会宛朝鮮総督府通信事務封筒	第二号 土器　(橙色鉛筆書)	
							小紙片	第二号 土器　(ペン書)	
1-15		縄文土器	深鉢	口縁部片 肥厚縄文	1点	○人　大11　5　26　N. 20	無地封筒 半裁	天井ヨリ 四尺八寸	森345拓本「第二貝塚集」41頁42「大11　5　26　第二」
1-16		城山略図 (半紙)	山を描き、向かって右より「千秋閣」「石段」「石段」「大楠根元ヨリ発見　井上達三」「大正十一年四月五日」　(墨書)				人類学教室宛南江堂外国雑誌部からの請求書封筒(昭和年号付き)	大正十一年 鳥居氏 四国行際 携帰 (桃色鉛筆書)	・井上発見の土器など6日夜東京大学へ送付『日日』大正11年4月7日付記事 ・1-16は龍王宮跡の大楠下出土のもの ・1-17は「滴翠閣西方岩窟下三尺」と「滴翠閣中央西隅森敬介氏発見地より五間下がって発掘」のものが混在している可能性がある。森氏発見地は第2号貝塚，滴翠閣西方岩窟は第4号遺跡を指すものと思われる。この頃は号数呼称・位置表現とも定まっていない。
	①	貝	マガキ		1点	なし			
	②	貝	ハマグリ		1点	なし			
	③	貝	サルボウまたはクイチガイサルボウ		1点	なし			
	④	貝	バイか(破片)		1点	なし			
	⑤	土師質土器	不明		2点	なし			
1-17	①	貝	ヤマトシジミ		3点	なし	人類学教室宛浅沼商会本店から封筒(昭和14年4月22日付け)	大正十一年 鳥居氏 四国行ノ際 (桃色鉛筆書き)	
	②	貝	ハマグリ		1点	なし			
	③	貝片(不明)			1点	なし	半紙片	大正十一年四月五日 第三 三尺下●一発見 井上達三　(墨書)	
	④	縄文土器	深鉢	肩部か 沈線2条	1点	なし			
	⑤	縄文土器	不明	胴部片	1点	なし			
1-18		貝	シオヤガイ		2点	人	無地封筒 半裁	大11　5　26　(墨書)	
1-19		貝	イタヤガイ		1点	人　大11　5　26　N.	無地封筒 半裁	天井石ヨリ2尺3寸 いたや貝　(墨書)	
1-20		獣骨	不明		1点	Ⅲ　No. 35	無地封筒	第三号貝塚 採第35号　骨一個 大正十一年四月22日出　(朱墨)	
1-21	①	獣骨	ウサギ　腰骨		1点	なし	無地封筒	大岩窟 12尺ノ地下三尺ヨリ 骨弐個貝壱個　(朱墨)	・現地で書かれた封筒の注記を人類学教室ラベルより優先して第3号洞窟貝塚出土とみなす
	②	獣骨	ウサギ　脛骨		1点	なし	理科大学人類学教室ラベル	第二號貝塚 貝類及骨類　(ペン書)	

仮番号		遺物内容			遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-21	③	獣骨	ウサギ	1点	なし	原稿用紙片裏	○兎　腰骨・右側右，脛骨，下部(ボールペン書？)	・現地で書かれた封筒の注記を人類学教室ラベルより優先して第3号洞窟貝塚出土とみなす
	④	貝	ヤマトシジミ	1点	なし			
1-22		人骨	左上腕骨	1点	○人　大11 5 4 No. 23	無地封筒	天ヨリ一尺六寸（墨書）	
1-23	①	獣骨	不明	1点		無地封筒半裁	No. 15　天井石ヨリ二尺 No. 16　天井石より二尺一寸（墨書）	・③の注記により、一括して第2号貝塚の
	②	獣骨	炭化？	1点				
	③	獣骨	不明	1点	人　大11　5 21 N15			
	④	獣骨	不明	1点	朱書判読不能			
1-24	①	縄文土器	深鉢　口縁部片	1点	なし	三康社印刷所(東京市)封筒	記載なし	・森313拓本「第二貝塚集」12頁12「大11　5　10　第二貝塚　　前田氏発見」
	②	獣骨	シカ　大腿骨	1点	なし	理科大学人類学教室ラベル	第二號貝塚 土器4及獣骨（ペン書）	
						原稿用紙片裏	○鹿　左，大腿骨，中央部 （ボールペン書？）	
1-25	①	獣骨	不明	1点	なし	半紙片	當初発見の位置にありしもの　☆（朱墨）	
	②	獣骨	不明	1点	なし			・前田432スケッチ「不明の骨(墨書)其七」
	③	獣骨	イノシシ　肋骨	1点	なし	東京人類学会宛世田谷郵便局通信事務封筒	第二号貝塚獣魚骨(墨書)	・前田430スケッチ「第二号貝塚　哺乳動物(鉛筆書)猪肋骨(墨書)　其五　大正十一年四月四日(鉛筆書)」
	④	鳥骨	不明	1点	なし			・前田431スケッチ「鳥骨(墨書)　其六(鉛筆書)」
	⑤	魚骨	ブリ　椎骨	1点	ラベル付表「長サ約八五セメノ　ぶりノ第一尾椎骨」 裏「Geriola quinqueradiota」			・前田433スケッチ「第二号貝塚　魚骨(鉛筆書)(鰤ブリ)(墨書)　大正十一年四月四日☆(鉛筆書)」 ・1-25遺物，森敬介の発掘記録に4月4日付で記述あり
1-26	①	獣骨	不明	1点	なし	無地封筒	岩窟(岩窟内スケッチ出土地点×)大岩窟入口木ノ根ヨリ奥へ二尺地下一尺五寸 骨　採第75号 （朱墨）	
	②	獣骨	不明	1点	なし			
	③	獣骨	不明	1点	なし			
	④	獣骨	不明	1点	なし			
	⑤	獣骨	不明	1点	なし			
	⑥	炭化物	不明	1点	なし			
	⑦	獣骨	不明	1点	なし			
	⑧	獣骨	不明	1点	なし			
	⑨	獣骨	不明	1点	なし			
1-27	①	獣骨？	不明	1点	なし	無地封筒	第三号貝塚 四尺の処 基本線ヨリ 南五尺下二尺 骨弐個　（朱墨）	
	②	獣骨？	不明	1点	なし			
1-28	①	獣骨	シカ　上腕骨	1点	なし	東京人類学会宛札幌郵便局通信事務封筒	記載なし	
	②	獣骨	シカ　上腕骨	1点	なし	無地封筒	大岩窟入口(略図地点に×)　木ノ根ノ下四尺二寸ヨリ　骨弐個	
						原稿用紙片裏	○鹿　左，上膊骨，下部（鉛筆書）	

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-29		木質片			1点	なし	無地封筒	ドルメンヨリ東部 水樋ト思ハルル所ノ 木質　（墨書）	・大正11年4月27日第3号洞窟貝塚前面発掘時に藩政期の木樋・鉄釘発見の記事
		木質片			1点	なし	東京人類学会宛大邱郵便局通信事務	記載なし	
		木質粉			ー	なし	理科大学人類学教室ラベル	城山貝塚　（ペン書）	
1-30	①	打製石斧	緑色片岩		1点	第二貝塚	理科大学人類学教室ラベル	第二號貝塚 石器類 人骨ノ頭邊ニアリシモノ　（墨書）	
	②	石斧状	緑色片岩		1点	表面 「Ⅲ　X　■5 Y　3.55 深　2.5 Ⅱ」 側面 「人骨貝塚 貝層中　X6. 0　Y3.5　西」	理科大学人類学教室ラベル	第二貝塚 石斧 頭邊ニアリシモノ一 （墨書）	・前田471スケッチ「Ⅱ　X6 Y3.5 深2.5(赤鉛筆書)」
	③	石斧状	緑色片岩		1点	人骨貝塚 頭骨附近			・前田476スケッチ「石斧(墨書)」
	④	石斧状	緑色片岩		1点	頭骨附近			・前田472スケッチ「石斧(墨書)」
	⑤	石庖丁状	藍閃石片岩？		1点	表面「人骨ノ東部ヨリ」 側面「頭骨附近」	理科大学人類学教室ラベル	第二號貝塚 石器類　（墨書）	・前田465拓本「第二号遺跡　石庖丁サヌカイト　糸にて此標本を固定したもの。庖丁の筋ではない。(墨書)」
	⑥	削器	安山岩？		1点	大11　5　27 か　人骨貝塚			・前田464拓本注記同上
	⑦	削器	安山岩？		1点	なし			
	⑧	削器	安山岩？		2点 接合	■■判読不能			・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載009
	⑨	石器？	泥岩		1点	なし			・前田484スケッチ注記なし
	⑩	縄文土器	深鉢か	口縁部 端部刻目	1点	○人　大11 5　26			・森323拓本「第二貝塚集」22頁⑳-2「大11　5　26　第二」
	⑪	縄文土器	浅鉢か	胴部か	1点	人骨貝塚			・森306拓本「第二貝塚集」6頁⑥「第二貝塚」 ・前田447スケッチ「Ⅲ号　同大」 ・『徳毎』大正11年5月5日スケッチ掲載002 ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載014
1-31		金釘	鉄製		一式	なし	無地封筒	第三号貝塚 金釘　（朱墨）	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿上に釘，下は厚紙片と新聞紙2枚折り込み ・大正11年4月27日第3号洞窟貝塚前面発掘時に藩政期の木樋・鉄釘発見の記事
							厚紙片	助任馬場弘誓寺裏貝塚出土(大正十一年五月二日)(鉛筆書)	
							新聞紙	東京日日新聞　大正十年十一月十八日付	
1-32	①	須恵質土器	甕	口縁～体部	2点	弘誓寺裏貝塚 ○三△×(接合部の表示)	理科大学人類学教室ラベル	助任町弘誓寺裏　貝塚 土器　（ペン書）	・大正11年5月4日弘誓寺貝塚調査の記事 ・黒色金属・ガラスケース入り
	②	鉄器	不明		1塊	人骨上層 ■株集	理科大学人類学教室ラベル	第二号貝塚の 鉄器　（ペン書）	・大正11年5月3日第2号貝塚出土の記事
							新聞紙	東京日日新聞　大正十年十一月二十五日付	脱脂綿下に新聞紙折り込み2枚

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
1-33	(1)①	剥片	チャート		1点	七	厚紙台紙(1)	・名東郡下八万村字市原　慈眼庵東南丘上　（ペン書）	・黒色金属・ガラスケース入り ・前田スケッチあり（一覧表外） ・『日日』大正11年3月28日付記事にある前田が大学に寄贈した遺物リストと大半が符合（大正3年～10年採集）
	(1)②	剥片	サヌカイト		1点	七			
	(1)③	須恵器	杯身	櫛描波状文	1点	七		釉薬ヲ引ける薄手の流れ紋ニ注意（ペン書）	
	(1)④	剥片	サヌカイト		1点	なし		・名東郡上八万村字山ノ上（俗ニ通称ス二城跡ト一） 古墳アリシト思ハルル斜面　（ペン書）	
	(2)①	剥片	サヌカイト		1点	なし	厚紙台紙(2)	南斜面丘上、ノ石鏃及土器 附其附近 前田正一 名東郡八万村恵解山西隣ノ山 古墳ノ附近地表（ペン書）	
	(3)①	剥片	サヌカイト		1点	なし	厚紙台紙(3)	香川縣三豊郡勝間村道音寺（ドロンジ）天神山下腹 第十一師団演習場元稲荷祠跡附近　散兵濠　掘壙中 ○備考　此附近弥生式土器ヲ出ス 大正十年十一月六日採集　前田正一	
	(3)②	石庖丁	サヌカイト		1点	なし			
2-1	①	土師質土器	皿		1点	城山第3号岩窟前	なし		・5-33～35土師質皿の一部か
	②	弥生土器？	体部片？		1点	Ⅲ No. 22 城山第三号岩窟 鳥居採			
2-2	①	木片			9点	なし	なし		・木箱入り
	②	獣骨	椎骨		1点	なし	なし		
	③	獣骨			1点	徳島城山第3号岩窟	なし		
	④	獣骨			1点	城山3号岩窟	なし		
	⑤	獣骨			1点	徳島城山第3号岩窟	なし		
	⑥	石			1点	なし	なし		
2-3	①						理科大学人類学教室ラベル	第三號巌窟　土器　（墨書）	
	②							第三號巌窟　土器　（墨書）	
	③							第三号巌窟　アイヌ派土器及　猪ノ椎骨　（墨書） 土器尻ノ内面ニハ胡粉ヲ引キタリ（ペン書）	
	④							第三號巌窟　アイヌ派土器(墨書)　當初発見(発掘)ノ　場所ヨリ出タルモノ(ペン書)	・5-32のもの
	⑤							第三号岩窟（ペン書）	
	⑥							第三號岩窟　土器　（ペン書）	
	⑦							第三號岩窟　土器　（ペン書）	
	⑧							第三號岩窟前　土器　（ペン書）	
	⑨							第三号岩窟　土器　（ペン書）	
	⑩							第三号岩窟　土器　（ペン書）	
	⑪						無地封筒	第三号貝塚　採方42号　木炭二個（朱墨）	
	⑫						無地封筒	土器ト貝ト炭　大岩窟の屋へ16尺ノ下三尺五寸　左岩ヨリ三尺（朱墨）	
	⑬						無地封筒	第三号貝塚 採第26号 土器壱個 大正十一年四月二十一日（朱墨）	・5-14・21のもの

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
2-3	⑭						無地封筒	第三号貝塚 採第11号骨三個 大正十一年四月二十一日（朱墨）	・5-28のもの
	⑮						無地封筒	第三号貝塚 採第　42号 土器　壱個　（朱墨）	・5-1のもの
	⑯						無地封筒	第三号貝塚 採第　43号 土器　壱個　（朱墨）	・5-12のもの
	⑰						紙片2	☆？　（朱墨）	
	⑱						ノート片	徳島城山？ Andesite-tuffite of maroine deposit, compose of volcanic details of glass, augite and hypers Home,mice with pernmains of maline organisms_Foraminifer and ? Rafiolbria. 火山灰ノ海中ニ沈積セシモノニシテ、玻璃、輝石、紫蘇輝石片ト共ニ有孔虫及放散中ノ遺殻ヲ混ス、時代は第三紀 名稱＿含化石凝灰岩　（含動物化石凝灰岩）（ペン書）	
	⑲	微粉末	？						
	⑳						カード	阿波城山　へ8－9(ペン書) D2－9（マジックインク）	
	21						紙片	阿波　城山　（鉛筆書）	
2-4							半紙片	第三号岩窟　サヌカイト石片 貝層底部土層中ヨリ☆(朱墨)	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿上に半紙片，下に無地封筒
							無地封筒	第三号貝塚　採第63号　小カヌサイト壱個 大正十一年四月二十	
2-5	①	石器？	円盤状		1点	人骨貝塚ノ北側ヨリ表土			・前田473スケッチ「石斧（墨書）」
	②	石器？	円盤状		1点	Ⅱ　X7.50 Y4. 50東 深48			
2-6	①	須恵質土器	羽釜足		1点	大正八年五月 名東郡加茂名町 字蔵本城ノ内 八坂社裏鉄道線路ノ北 お船戸サン 前田圃中	なし		・前田441スケッチ「土器の鼎形三脚と笠井新也父子発表　名東郡加茂名町城ノ内　大正八年五月前田正一軟き祝部　■と瓦の如し」
	②	須恵質土器	羽釜足		1点	大正十一年 三月廿七日 名東郡加茂名町 字蔵本城ノ内 鉄道線路ノ北 前田氏	なし		
	③	須恵質土器	羽釜足		1点	名東郡加茂名町 字蔵本城ノ内 大正十一年 三月二十六日	なし		・前田442スケッチ「弥生式把手」
	④	土製品	？		1点	なし	なし		・前田443スケッチ「三月二十七日」
3-1	①	埴輪	円筒		1点	なし	理科大学人類学教室ラベル	城山山頂ニテ発見 埴輪円筒及楯型　大正十一年十一月二十一日　鳥居博士採集	
	②	埴輪	楯型		1点	なし	理科大学人類学教室ラベル	円筒埴輪 (円筒埴輪のスケッチに採集の部位を示す)	
3-2		弥生土器	壺か	要接合	一式	不明	紙片	城山山頂	
3-3		土塊			一式		なし		
3-4		墨書メモ			1点		半紙	土器・骨・石器・などスケッチ	

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
4-1	①	貝輪	アカガイか サトウガイ		1点		紙片	A 1562 (12812)	・黒色金属・ガラスケース入り ・鳥居1923に「人骨の手のあたりに於いて貝輪の破片が発見された。」とある。
	②	貝輪			1点		理科大学 人類学教 室ラベル	第二號貝塚 貝輪　(墨書) 徳島城山 (ペン書)	
5-1		縄文土器	浅鉢	口縁部～ 胴部	1点	Ⅲ No. 42(朱墨) 城山第3号岩 小屋 (墨書)	無地封筒	第三号貝塚 採第42号 土器　壱個　(朱墨)	・2-3⑮封筒と符合
5-2		縄文土器	浅鉢	頸部～肩 部	1点	Ⅲ No. 21(朱墨) 徳島城山第3 号岩窟 (鳥 居採) (墨書)			
5-3		縄文土器	深鉢	口縁部 爪形文	1点	徳島城山第3 号岩窟 (墨 書)			・森318拓本「第二貝塚集」18頁⑯「大11 5 10 第二貝塚」 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載
5-4		縄文土器	深鉢	頸部 巻貝押捺	1点	なし			・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載 025 ・森236「第二貝塚集」23頁23注記なし
5-5		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3 号岩窟(鳥居) (墨書)			・森316拓本「第二貝塚集」16頁⑮「大11 5 10 第二貝塚」
5-6		縄文土器	深鉢	胴部	1点	城山第三号 岩窟　鳥居採 (墨書) Ⅲ No. 29 (朱墨)			・5-16と同個体か
5-7		縄文土器	深鉢	口縁部～ 胴部	1点	徳島城山第3 号岩窟(鳥居) (墨書)			
5-8		縄文土器	深鉢	口縁部	1点	徳島城山第3 号岩窟(鳥居) (墨書) (14)2 (朱墨)			・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載 026
5-9		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山 (墨書) 10尺左岩より 2尺5深4尺5 (朱墨)			・5-10と同個体か
5-10		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山 (墨書) 10尺左岩より 2尺5深4尺5			・前田423拓本か「アイヌ派土器　第三号遺跡(墨書)　Ⅲ16尺地下四尺五寸(朱墨)」 ・5-9と同個体か
5-11		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3 号岩窟(鳥居 採) (墨書) No. 30其一 (朱墨)			
5-12		縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	城山第3号岩 窟　Ⅲ No. 43 (朱墨)	無地封筒	第三号貝塚 採第43号 土器　壱個　(朱墨)	・2-3⑯封筒と符合 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載 021
5-13		縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	徳島城山第3 号岩窟　鳥居 (墨書) Ⅲ No. 21 (朱墨)			・前田404拓本・スケッチ「Ⅲ No21(朱書)　第三号遺跡出土　アイヌ派土器(墨書)　箍に所々切欠ぎあり(ペン書)」
5-14		縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	徳島城山第 三号岩窟 (鳥居採) (墨 書) 岩窟内ヨリ出 土　Ⅲ No. 26 (朱墨)	無地封筒	第三号貝塚 採第26号 土器壱個 大正十一年四月二十 一日 (朱墨)	・2-3⑬封筒と符合 ・5-18と同個体か ・森203拓本「遺物集」3頁③注記なし ・前田417拓本「第三号遺跡　アイヌ派土器(墨書)　Ⅲ No26 (朱墨)　箍(たが)たがに所々切欠あり　此手法の土器は第二号遺跡よりも池田町よりも出土す(墨書)　」 ・前田456スケッチ「Ⅲ No26号(朱墨)」 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載 021

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
5-15		縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	徳島城山第3号岩窟（墨書）			・森314拓本「第二貝塚集」14頁⑬注記なし ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載020
5-16		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3号岩窟　鳥居採（墨書）			・5-6と同個体か
5-17		縄文土器	深鉢	胴部	1点	城山第三号岩窟　鳥居採(墨書) ⅢNo. 29 (朱墨)			
5-18		縄文土器	深鉢	胴部	1点	城山■■鳥■採（墨書） ⅢY■■■ (朱墨)			・5-14と同個体か
5-19		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3号岩窟　（墨書）			
5-20		縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3号岩窟　（墨書） (14)3（朱墨）			
5-21		弥生土器	甕か	体部下半	1点	徳島城山第3号　鳥居(墨書) ⅢNo. 26岩窟内ヨリ出土 (朱墨)	無地封筒	第三号貝塚 採第26号 土器壱個 大正十一年四月二十一日（朱墨）	・2-3⑬封筒と符合
5-22	同個体	縄文土器	深鉢	胴部	1点	徳島城山第3号岩窟(鳥居)(墨書)			・5点接合
				底部	1点	徳島城山第3号岩窟　鳥居採（墨書）			
				底部	1点	徳島城山第3号岩窟(墨書)			
5-23		縄文土器	深鉢	底部	1点	徳島城山第3号岩窟（墨書）			
5-24		縄文土器	深鉢	底部	1点	なし			
5-25		縄文土器	深鉢	底部	1点	徳島城山第3号岩窟　鳥居採（墨書） ⅢNo. 46			
5-26		石核	サヌカイト？		1点	岩窟底土 (朱墨)			
5-27		石核	サヌカイト		1点	岩窟底土入口直奥 (朱墨)			
5-28		獣骨			1点	徳島城山第3号岩窟（墨書） ⅢNo. 11岩窟入口(朱墨)	無地封筒	第三号貝塚 採第11号骨三個 大正十一年四月二十一日（朱墨）	・2-3⑭封筒と符合
5-29	同個体	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	徳島城山第3号岩窟　鳥居採（墨書） ⅢNo. 29 (朱墨)			・前田407スケッチ「第三号遺跡　アイヌ派土器　ⅢNo29(墨書)」
5-30		縄文土器	深鉢	頸部	1点	徳島城山第3号岩　鳥居採(墨書) ⅢNo. 29			・5-29と接合
5-31		縄文土器	深鉢	口縁部	1点	なし			・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載023
5-32		縄文土器	深鉢	口縁部 波状突起	1点	徳島城山第3号岩窟当初発見(発掘)ノ場所ヨリ出デシモノ（墨書）	理科大学人類学教室ラベル	第三號巌窟　アイヌ派土器(墨書)　當初発見(発掘)ノ　場所ヨリ出タルモノ(ペン書)	・2-3④ラベルと符合 ・前田401スケッチ「四月四日第一号遺跡（第3号洞窟貝塚）出土　前田正一発掘(ペン書)」 ・『徳毎』大正11年4月24日掲載001 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載008 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載017

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
5-33	同個体	土師質土器	皿		3点	城山第3号岩窟前（墨書)3点とも			・10点接合 ・4月28日第三号洞窟貝塚前面の木樋周辺で出土の記事
5-34		土師質土器	皿		3点	城山第3号岩窟前（墨書)3点とも			
5-35		土師質土器	皿		4点	城山第3号岩窟前（墨書)4点とも			
5-36		土師質土器	皿		1点	徳島城山第3号岩窟前(墨書)			・4月28日第三号洞窟貝塚前面の木樋周辺で出土の記事
5-37		土師質土器	皿		1点	徳島城山第3号岩窟前(墨書) 岩窟前（朱墨)			
5-38		木葉	ツバキ		1点		理科大学人類学教室ラベル	第三号巌窟 椿ノ葉 石ノ平カナルヲ反シタル時其下二敷カレアリシモノ	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿下は，小包用包み紙折り入れ ・4月22日第三号洞窟貝塚出土の記事
		写真	出土状況		(1枚)		小包用包み紙　3枚	宛名「L'ANTHROPOLOGIE」(印字)住所併記，「人類」(鉛筆書)	
5-39	①	貝	カキ		1点		紙片	かき(まがき)	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿上に①～⑦遺物と紙片
	②	貝	ハマグリ		1点		紙片	はまぐり	
	③	貝	アサリ		1点		紙片	あさり	
	④	貝	サザエ		1点		紙片	さざえ	
	⑤	貝	バイ		1点		紙片	ばい	
	⑥	縄文土器	深鉢	胴部	2点				
	⑦	土師質土器		胴部	2点				
		城山略図(半紙)	左側に「第四発見　井上達三」 城山略図の上に「城山　滴翠閣　附近」，略図に左から「第二　第四発見第三」(全墨書)						・黒色金属・ガラスケースの脱脂綿下
	⑧	獣骨			2点		無地封筒	岩窟略図(墨書)に「岩窟入口」「ドルメン」(朱墨)，×印に「地下四尺五寸」(墨書)，「骨片　土器①」(朱墨)	
	⑨	土師質土器			1点				
							新聞紙	新聞名不詳　明治三十二年七月十三日付	
5-40	①	石器？	緑色片岩　扁平棒状		1点	○人	理科大学人類学教室ラベル	第二貝塚 石器類	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿上に①～⑤遺物とラベル，下に新聞紙2枚，白紙片5枚敷き込み ・④は森328「第二貝塚集」25頁「大11 5　10　午前11時」
	②	剥片	サヌカイト		1点	○人			
	③	剥片	サヌカイト		1点	人骨貝塚	新聞紙	中外商業申報　大正十一年四月十二日付	
	④	剥片	チャート		1点		新聞紙	徳島日日新報　大正十一年四月二十八日付	
	⑤	石器？	緑色片岩　棒状		1点	○人　大11 5　29	紙片	石庖丁	
5-41	①	貝	セトウチマイマイ		1点		理科大学人類学教室ラベル	第二貝塚 各種貝類	・黒色金属・ガラスケース入り 脱脂綿上に遺物①～③とラベル・注記紙片3枚
	②	貝	ヤマトシジミ		3点		紙片	せとうちまいまい	
	③	貝	マシジミ		3点		紙片	やまとしじみ	
							紙片	ましじみ	

仮番号		遺物内容				遺物注記	包装物・ラベル注記		備　　考
5-41	④	土製品	土錘	紡錘形	2点		東京市本郷区東京帝国大学理学部人類学教室東京人類学会　日本民族学会　第二回連合大会(専用封筒)	大安寺前(ペン書)	・黒色金属・ガラスケースの脱脂綿下
							紙片	網錘　大安寺前　二森氏採集　大正十一年三月二十四日　二十六日(墨書)	
	⑤	貝殻片	小片				第二回連合大会(専用封筒)	城山　　(ペン書)	
	⑥	石鏃	カヌサイト		1点		第二回連合大会(専用封筒)	城山貝塚？(ナラン)(ペン書)	
	⑦	石鏃	カヌサイト		1点				
	⑧	石鏃	カヌサイト		1点				
	⑨	剥片	安山岩？		1点				
							第二回連合大会(専用封筒)	城山貝塚　(ペン書)	
							無地封筒	大岩窟内　14尺　地下四尺ヨリ　魚ノ骨三個(朱墨)	
							無地封筒	大岩窟中央石ノ下　貝塚内三丁　カタツムリ壱個(朱墨)	
5-42	①	魚骨	ブリ		1点		理科大学人類学教室ラベル	第二貝塚　鰤ノ骨。兎ノ四肢骨。土製錘リ	・5-42黒色金属・ガラスケース入り
	②	獣骨	ウサギ		2点				・前田482スケッチ「獣骨器　第二号(ペン書)」
	③	土製品	土錘	紡錘形	1点				・森350拓本「第二貝塚集」46頁47「大11　5　11　第2貝塚」 ・前田483スケッチ「赤焼　土焼アミオモリ　第二号(ペン書)　右は弥生式様の焼物なり(鉛筆書)」
	④	獣骨			2点		無地封筒	第二号貝塚　採第21号　骨片二個　(人骨貝塚)(朱墨)	
	⑤	獣骨		下顎骨・牙	2点		無地封筒	人骨貝塚　採第18号動物骨一個　石器一個	
	⑥	石器？	緑色片岩剥片		1点				
5-43		小包表書き	城山　第二貝塚　人骨在中（墨書）				ラベル	徳島市城山第二貝塚人骨　大正十一年四五月	

表３　森敬介「徳島公園城山貝塚出土品拓本」拓本一覧

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
101	須恵質土器	甕か？	体部	1点	1頁①	大正十一年四月二十七日 第三号洞窟入口東立岩東平石ノ東裾	
102	縄文土器	浅鉢	口縁～体部	1点	2頁②	人骨貝塚朱線入土器(土ニ貝殻粉末ヲ交ユ)	・現物は1-12① ・12頁112と同個体
103	縄文土器	深鉢	口縁～体部 口縁下2条の沈線	1点	3頁③	人骨貝塚土器	・前田425拓本「第二号遺跡　アイヌ派土器(墨書)　(断面に)表裏(墨書)」
104	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	4頁④	人骨貝塚土器(上縁ノ水平ニ切ラレタルモノ)	
105	縄文土器	深鉢	胴部	1点	5頁⑤	人骨貝塚土器	・14頁114と同個体
106	縄文土器	深鉢	胴部	1点	6頁⑥	人骨貝塚	・森317拓本「第二貝塚集」17頁⑯「第二号貝塚　井」と同個体 ・前田408拓本「第四号出土」か

表３　森敬介「徳島公園城山貝塚出土品拓本」拓本一覧

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
107	縄文土器	浅鉢	口縁部 2条凹線	1点	7頁⑦	なし	
108	弥生土器	甕か？	体部	3点	8頁⑧	大正十三年一月二十二日　徳島公園城山人骨貝塚発見　弥生式土器　坩	・10頁110と同個体
109	弥生土器	甕か？	体部	1点	9頁⑨	大正十三年一月二十二日　徳島公園城山人骨貝塚発見　弥生式土器　坩 此土器破片ハ完全ナル人骨ノ傍ヨリ出デシ土器ト同一ノ破片ト思ハル	・11頁111と同個体
110	弥生土器	甕か？	体部	3点	10頁	大正十三年一月二十二日　徳島公園城山人骨貝塚発見　弥生式土器　坩	・8頁⑧108と同個体
111	弥生土器	甕か？	体部	1点	11頁	大正十三年一月二十二日　徳島公園城山人骨貝塚発見　弥生式土器　坩 此土器破片ハ最初人骨ノ傍ヨリ出デシモノト同一ノ破片ニ似タリ	・9頁⑨109と同個体
112	縄文土器	浅鉢	口縁～体部	1点	12頁	人骨貝塚朱線入土器(土ニ貝殻粉末ヲ交	・2頁②102と同個体
113	縄文土器	深鉢	口縁～体部 口縁下2条の沈線	1点	13頁	なし	・3頁③103と同個体
114	縄文土器	深鉢	胴部	1点	14頁	第二號貝塚	・5頁⑤105と同個体
115	縄文土器	深鉢	胴部	1点	15頁⑩	第二号貝塚	
116	弥生土器？	甕か？	体部	1点	16頁⑪	第一号貝塚(表裏」弥生式ノ■刷毛目アリ) 堅固ナル土器	
117	縄文土器	深鉢	口縁部？	1点	17頁⑫	人骨 第二号貝塚　大11　5　16	

表４　森敬介「徳島公園城山貝遺跡遺物集」拓本一覧

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
201	陶器	こね鉢	口縁～体部	1点	1頁①	なし	・東播系か ・井上518拓本⑱徳島城山自然石棺跡ヨリ採集セシ祝部土器 参種　大波され石ノ上部大石ノ間木ノ葉土ニナリタルモノ弐尺下ヨリ発見　表、裏、少し赤色、瓦色、厚サ（全て朱墨)」と同個体
202	須恵器	甕か？	体部	1点	2頁②	大11　5　1	・井上519拓本⑲「波され大岩ノ最上部中石ノ下　木ノ葉ノ土とナリタル中壱尺五寸下　表、裏、厚サ（全て朱墨)」と同個体
203	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	3頁③	なし	・5-14と同個体 ・前田417拓本「第三号遺跡　アイヌ派土器(墨書）ⅢNo26（朱墨）箍(たが）たがに所々切欠あり　此手法の土器は第二号遺跡よりも池田町よりも出土す（墨書）」 ・前田456スケッチ「ⅢNo26号（朱墨）」 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載022
204	陶器	すり鉢	体部	1点	4頁④	大11　5　12　第四　井上氏	・井上520拓本⑳「自然石棺ノ向テ左写真ノ端アル立チタル石ノ下三尺下ヨリ発見 表、裏、厚サ(朱墨)」と同じ
205	土師質土器	甕か？	体部	1点	5頁⑤	大11　5　9　第四　井上氏	
206	土師質土器	羽釜	口縁～体部	1点	6頁⑥	大11　5　9　第四　井上氏	
207	須恵質土器	甕か？	体部	1点	7頁⑦	なし	・前田119拓本「第四号遺跡　弥生式土器(墨書）　Ⅳ(朱墨)」
208	須恵質土器	壺か？	体部	1点	8頁⑧	大11　5　11 第四古■　井上氏発見	
209	縄文土器	深鉢	胴部 縄文LR沈線	1点	9頁⑨	大11　5　14　関東アイヌ派土器	・第2号貝塚か
210	縄文土器	浅鉢	肩部 沈線・刻目	1点	10頁⑩	なし	
211	縄文土器	深鉢	口縁部 縄文・刻目、内面沈線	1点	11頁⑪	なし	
212	縄文土器	深鉢	肩部 縄文RL・沈線・刻目	1点	12頁⑫	大11　5　14　関東アイヌ派土器	・第2号貝塚か
213	縄文土器	深鉢	口縁部 爪形文・沈線2条	1点	13頁⑬	なし	

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
214	縄文土器	深鉢	頸部～胴部 磨消縄文RL	1点	14頁⑭	大11 5 14 (断面に)上缺	・第2号貝塚か
215	叩石	円礫A面	長軸両端部に敲打痕	1点	15頁⑮	なし	
		円礫B面			16頁⑮	なし	
216	縄文土器	深鉢	胴部 縄文RL沈線	1点	17頁⑰	大11 5 24	・第1号貝塚か
217	縄文土器	深鉢か	肩部 羽状縄文	1点	18頁⑱	大11 5 24 第一 井上氏	
218	縄文土器	深鉢	底部	1点	19頁⑲−1	なし	
219	縄文土器	深鉢	底部	1点	19頁⑲−2	なし	
220	縄文土器	深鉢	胴部 条痕	1点	20頁⑳	口折	
221	縄文土器	浅鉢	肩部 沈線	1点	21頁21	大11 5 24 第一 井上氏 (断面に)上缺	
222	縄文土器	浅鉢	口縁部 内面縄文帯	1点	22頁22	大11 5 24	・第1号貝塚か
223	縄文土器	浅鉢か	底部	1点	23頁23	大11 5 23 第一 砂金粒	
224	縄文土器	深鉢	胴部	1点	24頁24	大11 5 26 第一貝塚 同上	
225	縄文土器	深鉢	胴部	1点	25頁25	大11 5 25 第一	
226	縄文土器	深鉢	胴部	1点	26頁26	大11 5 26 第一 井上氏	
227	土製品	小型 鉢？	口縁～底部	1点	27頁27	大11 5 22 第一	
228	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	28頁28	大11 5 24 第一 井上氏 (断面に)外	
229	縄文土器	浅鉢	口縁部	1点	29頁29	大11 5 24 第一 井上氏	
230	縄文土器	深鉢か	胴部 羽状縄文	1点	30頁30	大11 5 24 第一 井上氏	
231	縄文土器	浅鉢	口縁部	1点	31頁31	大11 5 24 第一 井上氏 (断面に)内 外（口縁端部拓本に)上部	
232	縄文土器	深鉢	口縁部 穿孔	1点	32頁32	なし	拓本のほかにスケッチあり 井上拓本⑮「徳島城山第一岩窟 穴ノアル土器 大正拾壱年五月弐五日発見 岩角ヨリ七尺五寸掘込タル所ヨリ採集 但桃ノ実と穴ヲアケタルモノト同ジアケ様ナリ(朱墨)」と同じ
233	縄文土器	深鉢	胴部	1点	33頁33	大11 5 24 第一 井上氏	

表５　森敬介「徳島公園城山第二貝塚遺物集」拓本等一覧

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
301	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	1頁①	第二貝塚	・現物は1-8 ・前田403スケッチ「土器の表面に鉢巻の如く箍をかけそれに切欠ぎを施したるもの これも阿波のアイヌ派土器なり(ペン書)」 ・前田486スケッチ「箍(たが) アイヌ派土器 池田町のも此土器出土せり(墨書)第二号遺跡森氏四月四日午後三時半発見(墨書)」 ・『徳毎』大正11年4月24日前田スケッチ掲載003 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載007 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載016
302	縄文土器	浅鉢	肩部か	1点	2頁②	なし	
303	縄文土器	深鉢	胴部 縄文RL	1点	3頁③	なし	
304	縄文土器	浅鉢	肩部 磨消縄文	1点	4頁	第二貝塚	・現物は1-12⑧ ・本集7頁307と同個体 ・前田446スケッチ「Ⅱ 渦巻的縄紋(墨書)」 ・『徳毎』大正11年5月5日前田スケッチ掲載004 ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載013 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月12日スケッチ掲載018
305	縄文土器	深鉢	胴部 条線	1点	5頁⑤	第二貝塚	・本集11頁311と同個体
306	縄文土器	深鉢	胴部 条線	1点	6頁⑥	第二貝塚	・現物は1-30⑪ ・前田447スケッチ「Ⅲ号 同大」 ・『徳毎』大正11年5月5日スケッチ掲載002 ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載014

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
307	縄文土器	浅鉢	肩部 磨消縄文	1点	7頁⑦	第二貝塚	・現物は1-12⑧ ・本集4頁304と同個体
308	縄文土器	浅鉢	口縁部 縄文帯	1点	8頁⑧	第二貝塚	
309	縄文土器	深鉢	胴部	1点	9頁⑨	第二貝塚 表　裏　(断面位置に)A	
310	縄文土器	深鉢	胴部	1点	10頁⑩	第二貝塚　大11　5　3(鉛筆書・墨書とも)	
311	縄文土器	深鉢	胴部	1点	11頁	第二貝塚	・本集5頁⑤305と同個体
312	縄文土器	深鉢	胴部	1点	12頁⑪	なし	
313	縄文土器	深鉢	口縁部 条線	1点	13頁⑫	大11　5　10　第二貝塚 前田氏発見	・現物は1-24①
314	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	14頁⑬	なし	・現物は5-15 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載020
315	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	15頁⑭	大11　5　14　(1)	
316	縄文土器	深鉢	胴部	1点	16頁⑮	大11　5　10　第二貝塚 苗	・現物は5-5
317	縄文土器	深鉢	胴部	1点	挟み込み17頁	第二号貝塚　井	・森106「拓本集」6頁⑥「人骨貝塚」と同個体
318	縄文土器	深鉢	口縁部 爪形文	1点	18頁⑯	大11　5　10　第二貝塚 (断面に)内　外	・現物は5-3 『徳島市史』第一巻1973拓本掲載
319	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	19頁⑰	大11　5　11　第二貝塚 赤焼白石英砂混在	
320	縄文土器	深鉢	胴部	1点	20頁⑱	大11　5　11　第二貝塚 赤焼白石英粒ヲ多ク認ム	
321	貝装飾	ハイガイ	中央に穿孔	1点	21頁	なし	スケッチと外面拓本
322	縄文土器	浅鉢	口縁部 肥厚沈線	1点	22頁⑳-1	大11　5　26　第二 断面と平面を点線でつなぐ 苗	・現物は1-7か
323	縄文土器	深鉢	口縁部 端部刻目	1点	22頁⑳-2		
324	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	22頁21		・現物は1-10
325	縄文土器	深鉢	胴部	1点	22頁22		
326	縄文土器	深鉢	肩部 凹線文巻貝圧痕	1点	23頁23	なし	・現物は5-4 ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載025
327	磨石	円礫		1点	24頁	大11　5　14　第二貝塚 (側面に)磨	
328	削器	チャート		1点	25頁	大11　5　10　午前11時 第二貝塚　苗	・現物は5-40④
329	縄文土器	浅鉢	口縁部 内外縄文帯	1点	26頁	大11　5　10 午前十時四十分　第二貝塚　(拓本に)表裏　(断面と拓本に)A　苗	・現物は1-12⑦
330	縄文土器	深鉢	肩部～胴部か　沈線・縄文	1点	27頁27	第二貝塚 大11　8　14	
331	縄文土器	浅鉢	口縁部 沈線	1点	28頁28	大11　8　14	
332	縄文土器	浅鉢	肩部 沈線	1点	28頁29		
333	石器か	磨石か		1点	29頁30	なし	
334	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	30頁31	大11　5　14	
335	縄文土器	浅鉢	口縁部 縄文帯	1点	31頁32	(断面と拓本に)A　A'　B　B'	
336	縄文土器	深鉢	胴部か	1点	32頁33	なし	
337	縄文土器	深鉢	口縁部か	1点	33頁34	なし	
338	縄文土器	浅鉢	口縁部 沈線・縄文	1点	34頁35	大11　5　12　第二貝塚 (断面対応箇所にA　B　C	・現物は1-12⑤
339	縄文土器	深鉢	胴部 縄文RL	1点	35頁36	なし	
340	縄文土器	深鉢	胴部	1点	35頁37		
341	縄文土器	深鉢	口縁部か 条痕、沈線？	1点	37頁38	第二貝塚	
342	縄文土器	深鉢	胴部	1点	38頁39	表　裏	

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
343	縄文土器か		胴部	1点	39頁40	第二貝塚	
344	縄文土器	深鉢	胴部	1点	40頁41	なし	
345	縄文土器	深鉢	口縁部 縄文帯	1点	41頁42	大11 5 26 第二 茴	・現物は1-15
346	縄文土器	深鉢	胴部 縄文LR	1点	42頁43	なし	・現物は1-12⑬ ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載011
347	縄文土器か	浅鉢	口縁部	1点	43頁44	なし	・前田424拓本・スケッチ「第二号遺跡 アイヌ派土器(墨書) (断面に)表 裏(墨書)」
348	縄文土器	深鉢	胴部	1点	44頁45	なし	
349	縄文土器か		口縁部か	1点	45頁46	なし	
350	土錘		ほぼ完形	1点	46頁47	大11 5 11 第二貝塚	・現物は5-42③ ・前田483スケッチ「赤焼 土焼アミオモリ 第二号(ペン書) 右は弥生式様の焼物なり(鉛筆書)」
351	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	47頁48	なし	・現物は1-12④ ・拓本とスケッチ
352	縄文土器	浅鉢	口縁部 縄文	1点	48頁49	第二	・現物は1-12⑥ ・拓本とスケッチ
353	縄文土器か	浅鉢	口縁部	1点	48頁50		・現物は1-12②
354	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	50頁51	なし	・現物は1-12⑪ ・スケッチ
					51頁51	第二貝塚 表 裏 外 A	・拓本

表６　前田正一採録城山貝塚関係拓本・スケッチ一覧

仮番号	遺物内容				記録種類等	拓本等注記	備考
401	縄文土器	深鉢	口縁部 上縁突起	1点	・県立図書館分類228封筒内、以下426まで同じ ・スケッチ	四月四日第一号遺跡(第3号洞窟貝塚)出土 前田正一発掘(ペン書)	・現物は5-32 ・『徳毎』大正11年4月24日付前田スケッチ」掲載(イ)001 「(イ)(ロ)城山大岩窟より出たる土器破片」 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載008 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載017
402	縄文土器	深鉢	口縁部 上縁刻み	1点	・スケッチ	此土器赤焼にて弥生式と思われ易きも阿波のアイヌ派土器なり、土器上縁の切欠き今少し多数アリ この断面真に近し 第三号遺跡出土 赤焼(ペン書)	・『徳毎』4月24日付前田スケッチ掲載(ロ)002
403	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	・スケッチ	土器の表面に鉢巻の如く箍をかけそれに切欠ぎを施したるもの これも阿波のアイヌ派土器なり(ペン書)	・現物は1-8 ・森301拓本「第二貝塚集」1頁①「第二貝塚」 ・前田486スケッチ「箍(たが) アイヌ派土器 池田町のも此土器出土せり(墨書)第二号遺跡森氏四月四日午後三時半発見(墨書)」 ・『徳毎』4月24日付前田スケッチ掲載(ハ)「城山滴翠閣前花壇西方岩角の下」003 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載007 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載016
404	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	・拓本・スケッチ	ⅢNo21(朱書) 第三号遺跡出土 アイヌ派土器(墨書) 箍に所々切欠ぎあり(ペン書)	・現物は5-13
405	縄文土器か	深鉢	胴部	1点	・拓本	Ⅱ 第二号遺跡 アイヌ派土器(墨書) (それぞれに)表 裏 (鉛筆書)	
406	縄文土器	深鉢	胴部 縄文施文	1点	・拓本		
407	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	・スケッチ	第三号遺跡 アイヌ派土器 ⅢNo29(墨書)	・現物は5-29か
408	土師質土器	甕	胴部	1点	・拓本(表面)	第四号出土(朱墨)	
409	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・以下3点同紙 ・拓本	第二号遺跡 アイヌ派土器(墨書) 赤ノアイヌ式(朱墨)	・現物は1-5③ ・東大所蔵資料も3点同一セット
410	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	黒 枕下二寸位(朱墨)	・現物は1-5②
411	弥生土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	赤 頭ト左腕トノ中間骨ト同一平面(朱墨)	・現物は1-5①
412	弥生土器	不明		1点	・拓本・スケッチ	第四号遺跡 弥生式土器 (ペン書) 弥生式 石棺と称する所(赤ペン書)	

仮番号	遺物内容				記録種類等	拓本等注記	備考
413	縄文土器	浅鉢	口縁部	1点	・以下3点同紙に拓本 ・拓本	第二号遺跡(鉛筆書)アイヌ派土器(墨書) 表　褐　裏　褐(鉛筆書)	
414	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	なし	
415	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	なし	
416	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	第二号遺跡　アイヌ派土器(墨書)	
417	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	・拓本・スケッチ	第三号遺跡　アイヌ派土器(墨書) ⅢNo26(朱墨)　箍(たが)　たがに所々切欠あり　此手法の土器は第二号遺跡よりも池田町よりも出土す(墨書)	・現物は5-14 ・森203拓本「遺物集」3頁3「注記なし」と同じ ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載
418	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	・拓本・スケッチ	第四号遺跡　箍(たが)　切欠ぎ(ペン書) Ⅳ(赤鉛筆)	
419	弥生式土器	不明	体部	1点	・拓本	第四号遺跡　弥生式土器(墨書) Ⅳ(朱墨)	・森207「遺物集」7頁7「注記なし」と同じ
420	弥生式土器	不明	底部	1点	・スケッチ	弥生式土器　第Ⅳ号遺跡(墨書) 赤焼(朱墨)	
421	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	アイヌ派土器　表　破断面　裏(墨書)　第三号貝塚　大正十一年四月四日　中黒表面のし赤(鉛筆書)	
422	縄文土器	浅鉢	口縁部	1点	・拓本	アイヌ派土器(墨書)　第二号貝塚　大正十一年四月四日　ウスアカ(鉛筆書)	
423	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本	アイヌ派土器　第三号遺跡(墨書) Ⅲ16尺地下四尺五寸(朱墨)	・現物は5-10か
424	縄文土器	浅鉢	口縁部 沈線1条	1点	・以下3点同紙 ・拓本・スケッチ	第二号遺跡　アイヌ派土器(墨書) (断面に)表　裏(墨書)	・森347「第二貝塚集」43頁44「注記なし」と同じ
425	縄文土器	深鉢	口縁部 沈線2条	1点	・拓本・スケッチ	(断面に)表　裏(墨書)	・森103「出土品拓本」3頁3「人骨貝塚土器」と同じ
426	縄文土器	浅鉢	口縁部 沈線2条・ 縄文施文	1点	・拓本・スケッチ	席紋　上縁　表　裏(墨書)縄紋(鉛筆書)	
427	貝	ハマグリか		1点	・県立図書館分類225「城山貝塚資料」封筒内以下445まで同じ ・スケッチ	第二号遺跡	
428	獣骨	イノシシか		4点	・スケッチ2枚	第二号貝塚 哺乳類動物~~大骨~~　猪(赤鉛筆)　其ノ二　大正十一年四月四日☆　A～F(鉛筆)	
429	獣骨	不明		1点	・スケッチ	第二貝塚　哺乳類動物骨　其四　大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	
430	獣骨	イノシシ		1点	・以下3点同紙 ・スケッチ	第二号貝塚　哺乳動物(鉛筆書)猪肋骨(墨書)　其五 大正十一年四月四日(鉛筆書)	・現物は1-25③
431	鳥骨	不明		1点	・スケッチ	鳥骨(墨書)　其六(鉛筆書)	・現物は1-25④
432	獣骨	不明		1点	・スケッチ	不明の骨(墨書)　其七	・現物は1-25②
433	魚骨	ブリ		1点	・スケッチ	第二号貝塚　魚骨(鉛筆書)(鰤ブリ)(墨書)　大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	・現物は1-25⑤
434	人骨	腰骨		1点	・スケッチ	第二号貝塚　哺乳動物其一(1)(鉛筆書)人骨(赤鉛筆)大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	
					・スケッチ	第二号貝塚　哺乳動物其一(2)(鉛筆書)人骨(赤鉛筆)大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	
					・スケッチ	第二号貝塚　哺乳動物其一(3)(鉛筆書)(人骨)(墨書)大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	
435	人骨	腰骨		1点	・スケッチ	第二号貝塚　哺乳動物人骨(赤鉛筆下線)其三大正十一年四月四日☆(鉛筆書)	
436	石器			1点	・スケッチ	第二号遺跡　Ⅱ　川原式　石庖丁表面ニ石灰華リ(墨書)	
437	石器			1点	・スケッチ	大正十一年五月三日頃掘サクシテ居ッタ(囲み)大正十一年五月十日第二号　石庖丁ノ半分　燧石	
438	貝	ハマグリか		1点	・以下3点同紙 ・スケッチ	大岩窟(墨書)	
439	貝	ヤマトシジミか		1点	・スケッチ		
440	貝	ヤマトシジミか		1点	・スケッチ		

仮番号	遺物内容				記録種類等	拓本等注記	備考
472	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	・現物は1-30④
473	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	・現物は2-5①
474	石器	棒状円礫		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	
475	石器	棒状円礫		1点	・スケッチ	なし	
476	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	・現物は1-30③と同じ
477	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧　散在　Ⅱ　人骨　頭と胸との中間線上の所に(墨書)	
478	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	
479	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	
480	石器	不明		1点	・スケッチ	入口岩窟(墨書) 入口岩窟(鉛筆書)	
481	石器	棒状円礫		1点	・スケッチ	石斧　城山　遺跡(墨書)	
482	獣骨	不明		2点	・スケッチ	獣骨器　第二号(ペン書)	・現物は5-42②
483	土製品	土錘	紡錘形	1点	・スケッチ	赤焼　土焼アミオモリ　第二号(ペン書)　右は弥生式様の焼物なり(鉛筆書)	・現物は5-42③
484	石器	泥岩		1点	・スケッチ	なし	・現物は1-30⑨
485	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	・スケッチ	アイヌ派土器なり(墨書)　赤焼　此上縁ニ所々ノ　土器の上縁なり破断口にあらず　表面貝発見二尺二寸所アリ　東四十五度傾斜　四寸(ペン書)	・現物は1-13
486	縄文土器	深鉢	口縁部 凸帯文	1点	・スケッチ	箍(たが)　アイヌ派土器　池田町のも此土器出土せり(墨書)第二号遺跡森氏四月四日午後三時半発見(墨書)	・現物は1-8 ・森301拓本「第二貝塚集」1頁①「第二貝塚」 ・前田403 ・『徳毎』大正11年4月24日前田スケッチ掲載003 ・『阿波名勝』第2号1922・7口絵写真掲載007 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月11日拓本掲載016

表７　井上達三「国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地」拓本一覧

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
501	縄文土器	深鉢	口縁～底部 縄文帯	2点	1頁①	徳島城山第一岩窟砂金入ノ土器 ・■ハ砂金ナリ(墨書)実物大、丸サ、厚サ、上表、表底、裏(朱墨) 大正拾壱年五月二十三日発見　第一岩窟貝層四尺五寸下　此破片始メテ発見シ以上七個合シタル形 井上写(朱墨)	・砂金は金雲母のこととみられる
502	縄文土器	深鉢	口縁～胴部 条痕文、穿孔	1点	2頁②	徳島城山第一岩窟穴ノアル土器 穴アリ、丸サ、表、裏、穴 大正拾壱年五月二十五日発見　第一岩窟岩角ヨリ七尺五寸奥エ掘込　岩ノ天井ノ所ニアリ此破弐拾個以上アリ十個ヲ合シタルモノニテ此破片ノ中ヨリ石ノ「カナツチ」代用ノモノ発見セリ 井上写(全て朱墨)	
503	縄文土器	浅鉢	口縁部～胴部	1点	3頁③	徳島城山第一岩窟ノ土器 表、裏、丸サ、 大正拾壱年五月二十二日発見　採集番■破片五個合シタルモノ採集　弐拾参号　壱(全て朱墨)	
504	縄文土器	深鉢	胴部	1点	4頁上④	徳島城山第一岩窟発見木ノ皮ノ如キ土器 表、裏、外、中 大正拾壱年五月廿五日（全て朱墨)	
505	縄文土器	深鉢	胴部	1点	4頁下⑤	徳島城山第一岩窟岩角ヨリ奥エ九尺ノ箇所ヨリ発見　土器 表、裏、中、外 大正拾壱年五月九日 井上写　（全て朱墨)	
506	縄文土器	深鉢	口縁～胴部 縄文帯	1点	5頁⑥	徳島城山第一岩窟土器 上、中、下、底ハ調査中、裏、丸サ 採集弐拾参号～弐 井上写（全て朱墨)	
507	軒丸瓦	小菊文		1点	6頁⑦	徳島城山採集瓦(墨書) 菊様瓦 大正拾壱年五月 第参岩窟附近　地下　四尺下ヨリ発見(朱墨)	
508	軒丸瓦	小菊文		1点	7頁上⑧	徳島城山採集瓦(墨書) 菊様瓦 大正拾壱年五月七日 旧豊玉比賣神社跡　　波され岩ノ所地下四尺下ヨリ発見(朱墨)	

仮番号	遺物内容				記録種類等	拓本等注記	備考
441	須恵質土器	羽釜	足	1点	・以下3点同紙 ・スケッチ	土器の鼎形三脚と笠井新也父子発表 名東郡加茂名町城ノ内 大正八年五月前田正一 軟き祝部　■と瓦の如し	・現物は2-6①
442	土師質土器	羽釜	足	1点	・スケッチ	弥生式把手	・現物は2-6③
443	土製品	不明		1点	・スケッチ	三月二十七日	・現物は2-6④
444	土製品	土錘	紡錘形	1点	・スケッチ	網錘(アミオモリ) 大正八年森氏 徳島市加茂名町大安寺前 黒色　褐色	・現物は5－41④
445	土製品	土錘	紡錘形	1点	・スケッチ		
446	縄文土器	浅鉢	口縁部 磨消縄紋	1点	・県立図書館分類222「城山貝塚説明書」封筒内以下447まで同じ ・スケッチ	Ⅱ　渦巻的縄紋(墨書)	・現物は1-12⑧ ・森304・307「第二貝塚集」4頁4・7頁7「第二貝塚」と同じ ・『徳毎』大正11年5月5日前田スケッチ掲載004 ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載013 ・前田正一「徳島城山の貝塚」『徳島新聞』昭和27年4月12日スケッチ掲載018
447	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	スケッチ	Ⅲ号　同大	・現物は1-30⑪ ・『阿波名勝』第2号1922・7拓本掲載
448	貝	二枚貝		7点	・県立図書館分類243「徳島城山貝塚其他出土品鑑　第一集」綴，以下484まで同じ ・以下全8点同紙 ・輪郭スケッチ	第一号遺跡(墨書)(うち左上貝の輪郭内に鉛筆書で)千秋閣ウラ	
449	巻貝	バイか		1点	・スケッチ	第一号遺跡(446と同じ図幅内)	
450	貝	ハマグリ		1点	・スケッチ	大蛤(墨書)	
451	貝	ハマグリ		1点	・スケッチ	第二号貝塚　蛤ノ大サヲ示ス　大正十一年四月四日(鉛筆書)	
452	貝	ハマグリ		1点	・スケッチ	第二号貝塚　大正十一年四月四日蛤ノ大サヲ示ス(鉛筆書)	
453	縄文土器	深鉢	胴部	1点	・拓本・スケッチ	徳島公園(城山)貝塚第一号遺跡 昭和七年八月十日採集　前田正一 赤 朱色(墨書)	
454	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	・以下3点同紙 ・スケッチ	第三号遺跡 黒(墨書)	
455	縄文土器	浅鉢	肩部	1点	・スケッチ	ⅢNo41(鉛筆書)	
456	縄文土器	深鉢	口縁部	1点	・輪郭スケッチ	ⅢNo26号(朱墨)	・現物は5-14 ・森203「遺物集」3頁3と同じ ・前田417と同じ ・『徳島市史』第一巻1973拓本掲載021
457	縄紋土器	深鉢	胴部？	1点	・輪郭スケッチ	ドルメン北側下部　赤(鉛筆書)	
458	弥生式土器	甕	体部？	1点	・スケッチ	なし	
459	石器	石庖丁？		1点	・以下2点同紙 ・スケッチ	石庖丁(墨書)	
460	石器	石斧？		1点	・スケッチ	なし	
461	石器	石庖丁？		1点	・スケッチ	ⅢNo46其六(朱墨)第三号遺跡 緑泥片岩　石庖丁(墨書)	
462	石器	サヌカイト		1点	・スケッチ	Ⅰ サヌカイト(朱墨) サヌカイト石庖丁　第壱号遺跡	
463	石器	サヌカイト		1点	・以下3点同紙 ・拓本	第二号遺跡　石庖丁　サヌカイト 糸にて此標本を固定したもの。庖丁の筋ではない。(墨書)	
464	石器	サヌカイト		1点	・拓本		・現物は1-30⑥
465	石器	サヌカイト		1点	・拓本		・現物は1-30⑤
466	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)第二号　人骨の辺りより(ペン書) 石斧　第二号遺跡　人骨頭胸中線上ニ散列(墨書)	
467	石器	石庖丁？		1点	・スケッチ	第三号遺跡　石庖丁(墨書) ⅢNo60椿の葉の下(朱墨)	
468	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	
469	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	石斧(墨書)	
470	石器	打製石斧？		1点	・以下2点同紙 ・スケッチ	石斧　Ⅱ　十四■最下部(ペン書) 第二号遺跡(墨書)	
471	石器	打製石斧？		1点	・スケッチ	Ⅱ　X6 Y3.5 深2.5(赤鉛筆書)	・現物は1-30②

仮番号	遺物内容				掲載箇所	拓本注記	備考
509	軒丸瓦	矢車文		1点	7頁上⑨	大正拾壱年五月 第四号自然石棺跡　大波され岩四尺地下ヨリ発見 井上写（朱墨）	
510	硯か	円盤形		1点	8頁⑩	徳島城山豊玉比賣神社跡地下四尺下発見 大正拾壱年五月七日発見 深サ弐分　井上写（全て朱墨）	
511	桃核	穿孔、笛か		1点	9頁上⑪	徳島城山第一岩窟ヨリ発見 桃のふゑ 大正拾壱年五月 大岩石ノ落チタル下ニ貝ト共ニハサマレアリ 立ニ吹くとひよ鳥のなき声の様ニヒーイト■音を発してよくなります(全て朱墨)	
512	桃核	穿孔、笛か		1点	9頁上⑫	徳島城山第三岩窟ヨリ発見 桃のふゑ 大正壱拾壱年五月弐拾弐日 岩窟前地下五尺下波され岩ノ間ノ壱尺中ニアリ 上ト同じ音色少し相違アリ 井上写　（全て朱墨）	
513	石器	サヌカイトか		1点	10頁上⑬	徳島城山第一岩窟デ発見　石小刀（ペン書） 黒キ油石ノ如キ石(朱墨)	
514	石器	サヌカイトか		1点	10頁中⑭	同ウヅキマ所ヲカキシモノ	
515	縄文土器	深鉢	胴部 穿孔	1点	10頁下⑮	徳島城山第一岩窟　穴ノアル土器 大正拾壱年五月弐五日発見 岩角ヨリ七尺五寸掘込タル所ヨリ採集 但桃ノ実と穴ヲアケタルモノト同ジアケ様ナリ(朱墨)	・森232「遺物集」32頁「大11　5　24　第一井上氏」と同じ
516	貝垂飾	ハマグリか	中央穿孔	1点	11頁⑯	徳島城山第一岩窟内ヨリ発見 細工シタル蛤貝 大正壱拾壱年五月（朱墨）	
517	貝垂飾		中央穿孔	1点	11頁⑰	徳島城第一岩窟内ヨリ発見 細工シタル赤貝 大正拾壱年五月 井上写　（朱墨）	
518	陶器	こね鉢	口縁～体部	1点	12頁上⑱	徳島城山自然石棺跡ヨリ採集セシ祝部土器 参種 大波され石ノ上部大石ノ間木ノ葉土ニナリタルモノ弐尺下ヨリ発見 表、裏、少し赤色、瓦色、厚サ　（全て朱墨）	・森201「遺物集」1頁「注記なし」と同じ
519	須恵器	甕か	体部	1点	12頁中⑲	波され大岩ノ最上部中石ノ下　木ノ葉ノ土とナリタル中壱尺五寸下 表、裏、厚サ（全て朱墨）	・森202「遺物集」2頁「大11　5　1」と同じ
520	陶器	すり鉢	体部	1点	12頁下⑳	自然石棺ノ向テ左写真ノ端アル立チタル石ノ下三尺下ヨリ発見 表、裏、厚サ　（朱墨）	・森204「遺物集」4頁「大11　5　12　第四井上氏」と同じ
521	陶器	椀	口縁～底部 高台付	1点	13頁上21	城山外ノ土器 助任町弘誓寺裏ヨリ発見シタル土器 上部、底、総寸（朱墨）	
522	陶器	椀	口縁～底部 高台付	1点	13頁上22	底ヲ別ニ製造シ附タルモノカハナレタルモノ 底、総寸（朱墨）	